

## 1. 資料整理の経緯

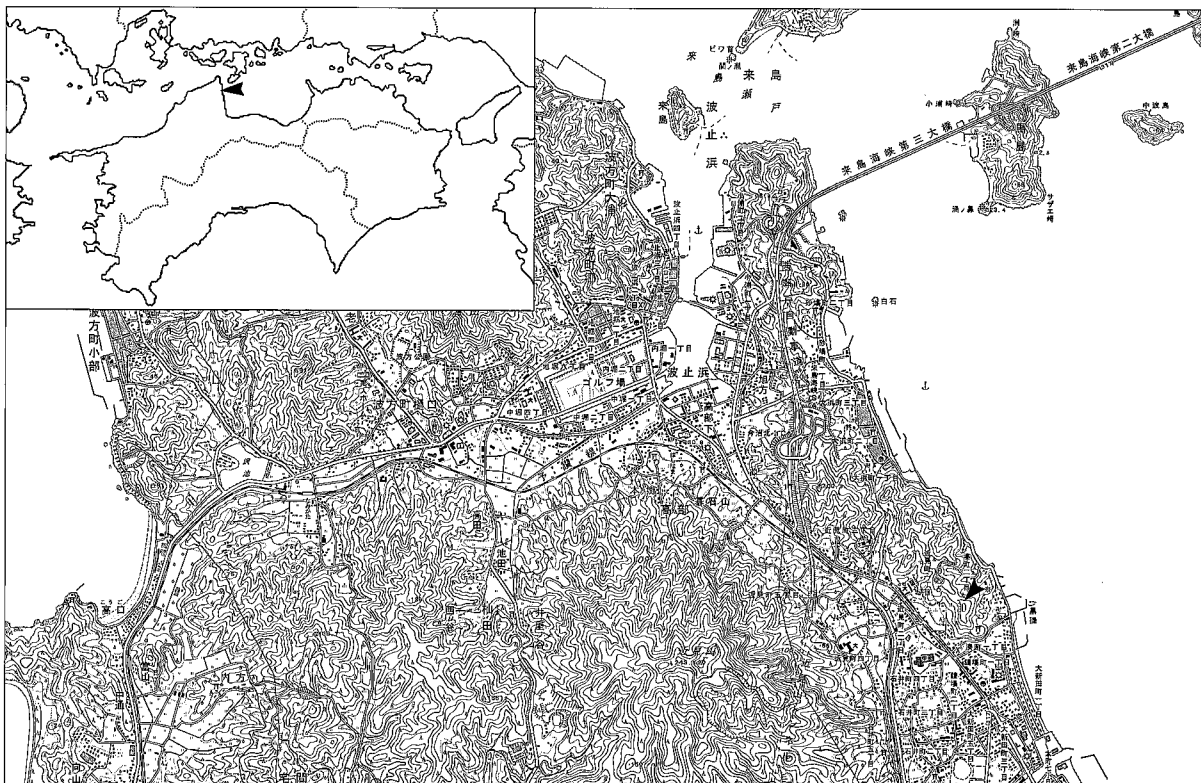
相の谷1号墳出土遺物は、1966年・1967年に実施された発掘調査後、愛媛大学文理学部西田研究室を経て、1980年より愛媛県立歴史民俗資料館（2005年3月閉館）にて保管・展示されていた。当館では、資料保存及び常設展示の活性化の観点から資料の所蔵先である愛媛県教育委員会文化財保護課と協議の上、2003年度より未整理資料を含めて一括で借用・保管し、保存処理及び整理作業を進めるとともに、作業が終了した資料は随時、常設展示室にて公開を行ってきた。当館で実施した保存処理・整理作業は下記の通りである。

- 青銅鏡の保存処理委託（2003年度～2004年度）
- 青銅鏡の資料化（2003年度～2004年度）
- 鉄製品の保存処理及びX線写真撮影（2003年度～2006年度）
- 未整理埴輪の洗浄（2004年度）
- 未整理埴輪の注記委託（2004年度）
- 未整理埴輪の分類・資料化（2006年度）
- 青銅鏡・埴輪以外の資料化（2006年度）

以上の資料整理・保存処理を経て、研究資料として当古墳出土遺物の再整理・再検討が必要であるという視点から、本書において、資料整理・保存処理の成果を公開するものである。

出土遺物の再整理にあたっては、①資料の保存を最優先すること、②未報告資料を取り上げ、これまでの報告を補うこと、③近年の調査研究成果を踏まえた内容とするこの3点を基本方針とした。

（富田尚夫）



第1図 相の谷1号墳位置図（S=1：50,000 国土地理院発行 1：25,000「波止浜」を改変）

## 2. 相の谷1号墳の調査及び出土遺物の保管

相の谷1号墳の調査については、調査後に刊行された報告書（愛媛県教育委員会 1966・1967／本書付編に再録）及び、調査参加者である正岡陸夫氏が主体となり報告書を補う形で行われた報告（正岡 1985）に詳しいが、ここでは、出土遺物を再報告するにあたって、その概要を紹介する。

### （1）発掘調査の経緯

1965年9月、東予新産業都市地域の埋蔵文化財包蔵地の調査を担当していた故松岡文一氏（県文化財専門委員）が宅地造成中に発見されたもので、県下最大の規模をもつ前方後円墳であること、破壊寸前にあることが報告された。それを受け、愛媛県教育委員会と今治市教育委員会、工事主体者の三者による対策協議の結果、工事は一時中止された。現地確認の結果、古墳の一部は破壊され、蓋石は墳外に持ち出されていることが確認されたため、緊急学術調査として発掘調査が実施されることになった。

### （2）第1次調査

第1次調査は、工事の進捗により墳丘壊滅の前に学術調査を実施しその文化的性格を究明するとともに記録保存を実施する目的で1966年3月5日から25日まで行われた。調査前の状況としては、「本古墳は近見小学校を擁する的地帯にある独立山塊の東南端にある一主峯海拔63.5mを後円部とし、ほぼ北方（北11度東）に向かって前方部をもつ。全長82m、墳丘前方部比高8.263m、後円部10.513m、前方部巾40m、後円部径50.28mほぼ二段築成になっている。全体にわたりおよそ上下二段に葺石を約0.5m～1m巾にめぐらし、その間に多くのハニワ片を残存する。クビレ部と谷間には河原石からなる径15cm大の栗石が過去の葺石だったことを物語るかのように流れ落ちこんでいる。（上段葺石の高さ下段より約3.6m上）

後円部上段の葺石層の一部は既に土木工事による地盤亀裂のため石の列を乱され、同じ後円部西端では下段基底の葺石層列も同様に乱されている。

なお、この周辺には南接する続きにも、また北接する前方部の東北並に西北部にも、それぞれ墳丘らしいものや明らかな前方後円墳が存している。これらの古墳群のうちで当墳は最も際立った第一号墳として数え上げる規模をもつものとして考えても誤りのないものであろう。」（愛媛県教育委員会 1966, p. 5）とされている。

調査の概要は、「発掘日誌」によると、墳丘にA～Eの5箇所のトレンチを設定し、それぞれを掘削し、葺石、根石を検出するとともに、墳丘西側で括れ部の検出が行われている。また、後円部では主体部の確認及び内部の掘り下げが行われ、内部構造の一部が復元想定されている。

内部主体である竪穴式石室は、「石室長軸は墳丘主軸に平行。内法7.1×1.08m。竪穴式石室内部の築成におもに用いられた小口積の板石は輝石安山岩であり、当市には産せず、隣接の玉川町竜岡地区に見られる種類に属する。石室天井は表土より0.8～1.0m下にあったかと思われるが、天井の蓋石は全くなく、石室の側壁も6～7割は崩されて板石を失い、その高さは正確には分らない。ただ現存し

ている底面から1 m以上あり、その上に多少持送式にせり出していたものかと考えられる。また床面も板石を敷いていた形跡もあるが、これもかく乱されて把握しがたい。過去に掘りかえされた石室北端(写真参照)にて知られるように、掘下げられた土坑(墓坑)底面に約15cm大の栗石を敷き、その上に玉砂利の大小のものを配し、その上に板石を置き、これを粘土で覆っている。その形は崩れているが、この上に木棺をのせたかとみられる。」(愛媛県教育委員会 1966, p. 6)と記され、遺物出土状況の平面図と東壁原形残存部の実測図が掲載されている。

副葬品は「ほとんど長軸側壁の台石の内部にせり出している部分の上に配列されていたようである。しかしこれもかく乱されて壁体の混入土砂礫中から出土するものもある有様で、その原位置は確かなことはいいがたいほどであった。」(愛媛県教育委員会 1966, p. 6)と記され、出土遺物として次のものが記されている。

#### A 外周より出土したもの

○埴輪破片 多数未整理なるも葺石層中に

- 一、円筒型ハニワと思われるもの
- 二、朝顔形ハニワと思われるもの(図版参照)

その他種種ある見込、鋸歯文や竹管文ある破片も出土

○土器片、クビレ部及び前方部への西側日当りよき部分の上段平面に

- 一、山杯形の土師器(底部は手づくね)
- 二、甕形の三脚付きの土師系土器(図版参照)
- 三、後円部その他で須恵器片二点

#### B 後円部竪穴式石室出土遺物

一、三角縁(高さ五ミリメートル、巾八ミリメートル)の青銅鏡、(径一三センチメートル)外区の獣文帯?について鋸歯状文、櫛状文などが順に見えるが内区の神獣などさだかでない。神像その他獣形もある様子(挿図参照)

- 二、鉄剣 四?
- 三、鉄直刀 三?
- 四、小刀子 四(鉄のみ二を含む?)
- 五、鉄斧 二(袋付斧一を含む)
- 六、やりがんな 二?
- 六、その他の鉄器片多数。計測値後出(写真参照)

以上のように第1次調査では、後円部を中心に墳丘と主体部が調査されている。「前方部のほとんどは未調査で次年度に第二次の作業として考えられている」(愛媛県教育委員会 1966, p. 9)と記すように前方部は翌年の第2次調査として実施することが検討されている。

### (3) 第2次調査

翌1967年3月5日から4月にかけて行われた。第1次調査の補足調査として、後円部の内部主体の

調査と前方部及び括れ部で葺石・根石の検出が行われている。前方部の調査は「西側の墳丘を全面発掘して、葺石や平坦部の敷石、埴輪などを中心に」行われた（正岡 1985）。

内部主体の調査では「床面下の粘土層中その他より若干の遺物」が検出されている。鼈鏡は「鏡背（文様ある方）を上にして、攪乱層に混入していたものであり多くの朱をその文様の間にとめてある。なおこの外にも前回とりあげた鉄剣、刀子などの残欠部と思われる片々や用途不詳の石づきの先のような銅製品の円錐筒」が検出されている（愛媛県教育委員会 1967, p. 2）。

前方部の調査では、「北西側の前方部に接続するくびれ部においては別紙写真参照のように（葺石層が）明瞭に存続していることが確認出来た。また二段にわたる葺石層の下段については前方部の西側にては殆ど全面的にね石を明かに遺存しており、前方部縁端の前方正面に当る北側にも、右側に当る北東部にも葺石列の根石並にその外側の敷石を認めることが出来た。かくして当前方後円墳の周囲には前回報告に記載した通り二段築成の葺石列の存在をほぼ誤なく証明しうるように思う。」と記されている（愛媛県教育委員会 1967, p. 2）。

また、同時に周辺に所在する 8号墳・9号墓・10号墳が発掘調査されている<sup>(1)</sup>。

1号墳は調査後、開発工事区域から外され、墳丘の一部を失いながらも現存している。発掘調査はこの2回のみであり、「今後残された部分は前方部斜面、東側である。」（正岡 1985）と指摘されているように墳丘においても未調査部分があり、発見・調査後、約40年を経た現在においても、検討課題がある<sup>(2)</sup>。

#### （4）遺物の出土状態

今回報告する遺物の出土状態について正岡氏の報告文を引用する。

##### ① 竪穴式石槨内

「石室内は古くから損乱されていたため、原位置を保っているものは少ない。上層部に含まれていたものは除き、粘土床に近いものは原位置に近いものと推定し、概要を述べる。

銅鏡は2面あり、鼈鏡はほぼ中央において、背面を上にした状態で検出された。全面に朱が付いているが、移動していると判断された。もう1面は画像鏡で、西壁の中央部よりやや南寄りに位置し、破片となって検出された。原位置を移動し、後に破砕されたものである。小型の円錐筒形銅器は中央部より南寄りに位置している。

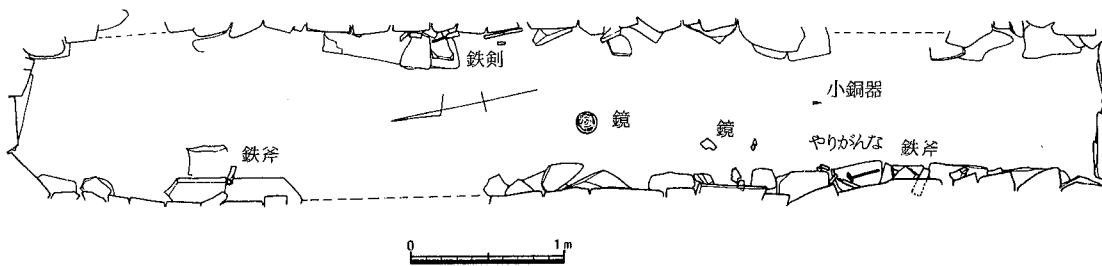
その他の鉄器について、東側沿いにみていくことにする。中央部より少し北へ寄ったところに直刀、剣の破損したものが検出されるが、原位置に近いものと推定される。南側は著しく破壊されていて原位置と推定できるものはない。

西壁沿いにみると、北寄部分で粘土に埋没した状態で袋状鉄斧1個が検出された。中央より少し北側は、側壁とも著しく破壊されていたため、直刀、剣が破損し、散乱した状態で検出された。中央より南側では壁に沿って板状鉄斧1、袋状鉄斧1、やりがんな1、鉄剣などが検出された。これらは原位置に近いものと推定される。」（正岡 1985, p. 15）

## ② 墳 丘

「埴輪は第1段目、第2段目の平坦部に立てられていたようである。墳頂部は明らかでないが主体部付近からも埴輪片が出土することから立てられていたと推定される。埴輪はいずれも破片となって散乱している。D トレンチの東側上段平坦部において1基だけ原位置を確認した。平坦部の端近くに地山を約5cm掘り込み、円筒埴輪をすえている。西側くびれ部の上段平坦部において円筒埴輪の一部がまるく残っていて、胴部の直径がわかる。円筒埴輪と壺の破片数からして、円筒埴輪の上に二重口縁の壺をのせていたものと推測される。

第2段目の両側のくびれ部には幅25cmの溝があり、土師器の杯、鉢、三脚付鍋などを出土した。」  
(正岡 1985, p.13)



第2図 竪穴式石槨内遺物出土状況 (正岡 1985, p.14より転載)

### (5) 出土遺物の保管

出土遺物は、1966年・1967年の発掘調査後、調査主任として調査を担当された愛媛大学文学部西田栄氏の研究室で保管・整理が行われた。西田氏の退官後の1975年には愛媛県教育委員会に移管され、1980年より愛媛県立歴史民俗資料館(2005年3月閉館)にて保管・展示されていた。2002年度には、一部未整理資料について愛媛県立歴史民俗資料館から愛媛県教育委員会文化財保管施設への移動が行われている。

1966年・1967年の発掘調査報告書及び正岡氏の報告(正岡1985)と現存する遺物を照合すると、鉄製品の一部が残存していない。当館において再整理をするにあたり、関係者に事情を聞いたが、どの時点で、どの資料が残存していたかは、不明である。

そのため、今回の報告では、これまで報告されている資料が一部欠落している。なお、調査時に作成された図面や撮影された写真フィルムの記録類は、2007年2月に正岡陸夫氏より当館に寄贈いただいた<sup>(3)</sup>。

### 註

- (1) 8号墳・10号墳については、正岡1985, p.25-36, 38-48で、9号墓については正岡・泉本1973でそれぞれ報告されている。なお、8号墳・10号墳出土遺物についても当館にて保管している。
- (2) 検討課題については、第3部総括に列挙した。
- (3) これらの記録類は今後当館にて整理予定であるが、本目録において一部の写真フィルムを使用させていただいた。

(富田)

### 3. 資料一覧

品目	数量	図版番号	写真図版
〈鏡〉			
禽獣画像鏡	1	第3図	図版3・4・7
鼉龍鏡（獣紋鏡）	1	第4図	図版5・6・7
〈武器〉			
剣	9	第5図1・2、第6図3～9	図版8
刀	2	第7図10・11	図版9
刀剣片	10	第7図12・13、第8図14～21	図版9
〈農工具〉			
刀子	2	所在不明	
鑿	2	所在不明	
短冊形鉄斧	1	所在不明	
有袋鉄斧	2	所在不明	
鉞	1	所在不明	
〈土器〉			
土師器	2	第9図1・2	図版10
〈その他〉			
埴輪片	88 (4241)	第10図1～第21図88	図版11～17
中世土器	14	第22図1～第23図14	図版18・19
円錐形銅製品	1		図版10

#### 4. 相の谷1号墳出土遺物の保存修復

##### (1) 銅鏡

###### ① はじめに

愛媛県歴史文化博物館より委託を受け、相の谷1号墳出土遺物のうち、平成15年度に甕龍鏡、平成16年度に画象鏡の保存処理を実施した。本稿では当研究所において実施した保存処理について報告する。

###### ② 保存処理

###### 【遺物の現状】

甕龍鏡は完形であり鏡背面には赤色顔料が残存していた。ただ鏡面、鏡背面とも全体的に小さな瘤錆が多数確認でき、その一部は表層が崩れ緑青が認められた。

画象鏡は出土時には既に多くの破片に分かれており、その一部は欠失しており応急処置的に厚紙に接着・固定された状態であった。

###### 【処理方針】

保存処理方針を検討した結果、クリーニング、防錆処理、樹脂含浸等通常の保存処理工程を行い、画象鏡については、欠損部をエポキシ樹脂により復元を行うこととした。また、接合箇所が多いため強度が十分に保てない恐れがあるので、安全に保管・管理できるよう支持台を作製することとした。

###### 【処理前調査】

処理前の状態を記録するため、写真撮影（写真1）ならびにX線透過試験（写真2）を行った。特にX線透過試験により、目視では確認できなかった細かなクラックが確認できただけでなく、鏡背の紋様や接合状況について確認できた。なおX線透過撮影は次の条件である。

装置：フィリップス社製 X線透過試験装置 MG225型

フィルム：Fuji X-ray film Ix100 増感紙：鉛増感紙 LF0.03 焦点フィルム間距離：100cm

###### 【応急処置への対処】

画象鏡の厚紙と接着剤を除去するにあたり、通常の保存処理で使用される接着剤であれば溶融する洗浄液（アセトン・酢酸エチル・エタノールの混合液）や、アセトンに浸漬しても接着剤に全く変化が見られなかったため、接着剤の成分についてFT-IR分析を行った結果、アクリル系の接着剤であ



写真1 処理前写真（左：甕龍鏡 右：画象鏡）

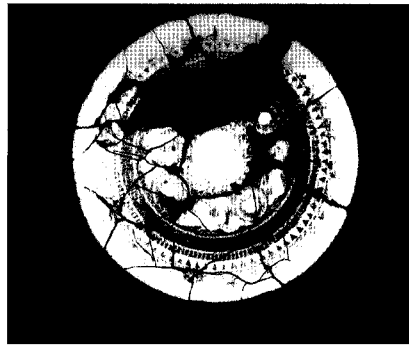
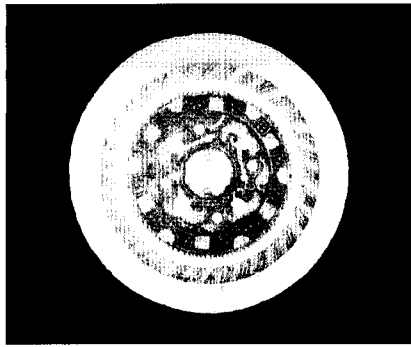


写真2 X線透過写真（左：鼉龍鏡 右：画像鏡）

ることは分かったが、種類の特定までは至らなかった。

そこで、鏡面に付着している接着剤を除去するのに有効と思われる幾つかの溶剤を用いて除去を試みたところ、クロロホルムに浸漬すると接着剤が軟化することが判明したため、クロロホルムを用いて接着剤の除去を行うことにした。

#### 【クリーニング】

表面の土や砂、錆などを、鼉龍鏡では赤色顔料に注意しながらアルコールを用い筆や綿棒などで除去した（写真3）。

なお、鼉龍鏡鏡面のマーキングはアルコールでは除去できなかったため、メスを用い鏡面を傷つけないように慎重に除去した。

また、画像鏡表面の厚紙及び接着剤は、遺物をクロロホルムに浸しながらメス、竹串、筆等を用いて除去した（写真4）。破片は薄く、X線でも劣化により脆弱になっている箇所が見られたため、過度に負担がかからないよう慎重に作業を進めた。

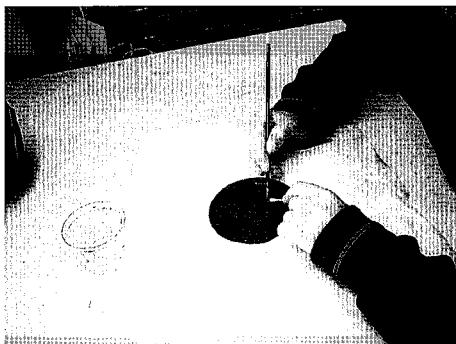


写真3 鼉龍鏡のクリーニング

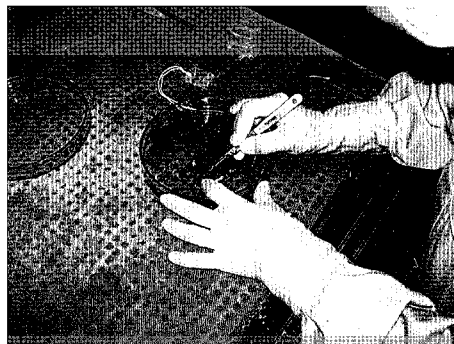


写真4 画像鏡のクリーニング

#### 【BTA 処理】

青銅製品なので脱塩処理を行わず、BTA 溶液（ベンゾトリアゾール・3%アルコール溶液／片山化学）に浸漬した状態で減圧含浸を実施した。BTA 処理は遺物内部の塩化物イオンを溶出させるのではなく、化学反応により錆の進行を抑える方法である。



### 【樹脂含浸】

遺物強化と防錆のため、フッ素系アクリル樹脂（V フロン・25%ナフサ溶液／大日本塗料㈱）による減圧含浸を3回実施した。

### 【樹脂塗布】

遺物と外気との接触を可能な限り少なくして防錆効果をあげ遺物を保護するため、樹脂含浸に使用した樹脂を有機溶剤で薄め、遺物表面に3回塗布した。

### 【接合・復元】

鼈龍鏡については細かなクラックについてエポキシ樹脂による補填を行った。

画像鏡については、一部の接合にはシアノアクリレート系接着剤を使用し、欠損部の補填と復元にはエポキシ樹脂を使用した。接合の状態が分かる様に目地の補填は最小限に抑え、欠損部の補填については、復元部分であることが区別できるよう、鏡背側は紋様をつけずフラットに仕上げた。

また、搬入時に元位置でなかった破片（写真5矢印）について、銘文や櫛歯紋帯の間隔等を基に元位置の推定を行った。銘文は類例や字間の距離等より、欠損部分には「上 有 仙（山） 人」の4文字入るのが適当であり、破片に見られる文字の一部は「山」であると考えられる<sup>(注)</sup>ことから、残存する銘文の文字から距離を測り、おおよそ元の位置であると推定される位置に補填材で固定した。また、補填及び復元部は周囲との違和感がないようにアクリル絵の具による補彩を行った。



写真5 破片（前処理）

### 【処理後調査】

処理後の経過を観察し、写真撮影を行った。

### 【支持台作成】

画像鏡については、遺物を安全に展示・保管するために、支持台及び台を覆うアクリルケースの作製を行った。

### ③ おわりに

保存処理を実施する際には、使用する材料は基本的に可逆性のある材料を用い、その使用を明らかにすることが前提となっている。ただかなり以前の発掘に伴う応急処置的な補修の場合、使用された材料が明確でなく記録が残されていない場合がある。補修技術としては優れたものもあるが、材質によっては非常に除去が困難なものもあり、無理に除去すると遺物に影響を与える恐れも考えられる。今回画像鏡に使用されていた接着剤についても、記録がないため成分の特定ができず、そのために除去も困難なものとなった。保存処理に携わる者として、これまで以上に慎重に処理を行い、記録を残し、後世にその履歴を正確に伝えていくことの責任を感じる。

(注) 銘文および破片の位置については、福永伸哉氏（大阪大学）に御教授戴いた。

（財）元興寺文化財研究所

## (2) 鉄製品

### ① 処理前の様子

このたび相の谷古墳群より出土した鉄製品48点（直刀片23点、鉄鏃22点、鎌3点）の保存処理を行った。肉眼で見たところ、鉄鏃や鎌のサビは比較的安定していた。しかし、直刀の一部はきわめて脆い状態になっており、中には黄色いサビが噴出し、層状に剥離していたものもあった。そこで、サビを取り除くとさらなる崩壊が危惧されたことから、アクリル樹脂を塗布して仮強化処置を行ったのち、クリーニング、樹脂含浸等通常の保存処理工程を行った。以下にて、相の谷1号墳より出土した直刀片の保存処理工程の概要を紹介していく。

### ② 保存処理の概要

#### 【処理前調査】

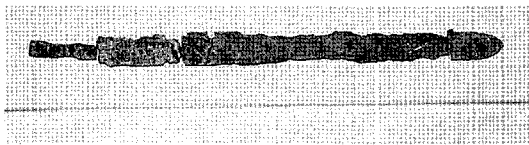
処理前の状態を記録するため、写真撮影（写真①）ならびに X 線透過撮影（写真③）を行った。なお、X 線透過撮影は次の条件である。

装置：理学電機社製 X 線透過撮影装置 RADIOFLEX-150T（写真②）

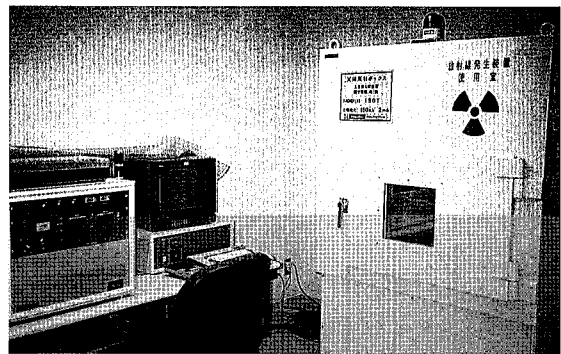
フィルム：Fuji X-ray film I x100

焦点フィルム間距離：60cm

電圧56.3K.V.P 電流1.4mA. 露出3分（直刀片）



写真①



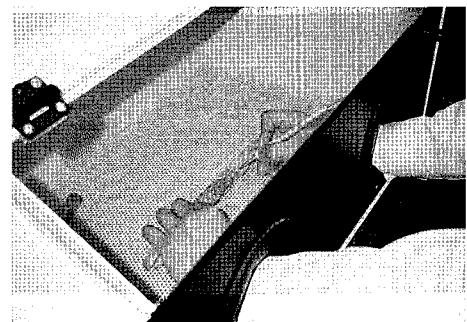
写真②



写真③

#### 【クリーニング】

表面の土やサビを精密小型グラインダーや超音波研磨装置、精密噴射加工器などによる機械的な方法で除去した（写真④）。



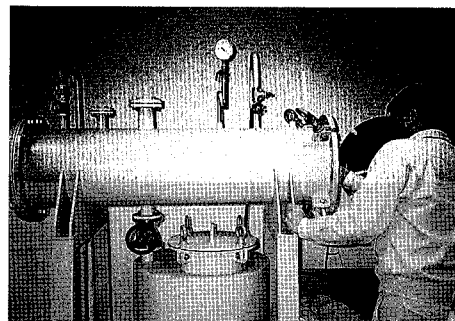
写真④

#### 【洗浄・脱塩】

水酸化リチウム／アルコール溶液に遺物を浸けこんで処理し、アルコール脱水と強制乾燥を実施した。

#### 【樹脂含浸】

遺物強化と防錆のため、非水溶性アクリルエマルジョン系合成樹脂（パラロイド NAD-10）による減圧含浸を3回実施した（写真⑤）。



写真⑤

#### 【接合・復元】

接合にはシアノアクリレート系樹脂とエポキシ樹脂を使用した。なお、小片の接合を行ったが、大きな部分については歪みが大きくなるなどの理由で、特に接合はしなかった。

#### 【処理後調査】

処理後の状況を記録するため写真撮影を行った。

（亀井英希）

## 5. 相の谷1号墳出土遺物

### (1) 銅鏡

#### ① 禽獸画像鏡【第3図】(正岡第13図)

**遺存状況** 破片にて出土し、現状では約41片に分割している。出土状況は「西壁の中央部よりやや南寄りに位置し、破片となって検出された。原位置を移動し、後に破碎されたものである。」(正岡1985)とされ、どの段階で破碎されたかは不明であるが、割れ方からは攪乱時又は、土圧による破碎の可能性が強いと考えられる。ブロンズ病が進み、鈕、縁部を中心に錆化が認められる。

**鑄はだの特徴** 縁部の内側や銘帯には部分的に白銅質で光沢がある。鏡表は白銅質で光沢が残存している。

**研磨** 鈕座には放射円状の研磨痕が認められる。

**法量** 面径12.6cm 厚さ0.5cm 面反り0.2cm 重量172.10g (保存処理前・台紙込み)

**文様構成** 鈕を中心とし、その外周に連珠紋の鈕座がめぐり、鈕座と内区の間には一条の突線がめぐり、内区は四乳(1個欠損)で区切られ、鳥像と獣像が配される。その外側には一条の突線がめぐり、銘帯・外区となる。外区は内側から列線紋・鋸歯紋・連続三葉紋で構成される。連続三葉紋の外側にはそれぞれ一条の突線がめぐり、外区の内側斜面は無紋である。

**鈕** 径2.0cm 高さ1.0cmで、頂部を中心に錆化が著しく、一部欠損する。鈕孔の断面形態は隅丸方形を呈する。下端幅0.55cm 上端幅0.5cmである。一条の圈線を介してと連珠紋の鈕座がめぐり、圈線は約1/2が欠損し、残存部も鑄出しが浅く、約1/3が遺存するのみである。連珠紋は17個の珠紋が残存している。

**内区** 紋様の鑄出しは全体的に浅い。主紋部は四乳四像式で、主紋帯幅は1.9cmである。三個の乳と羽を有する鳥像二体・獣像一体を確認することができる。円座乳は乳座径1.4cm、底径0.6cm、高さ0.5cmである。鳥像と獣像の表現は下記の通りである。

鳥像-1 羽と頭部・脚部を表現する部分が確認できる。頭の表現は鳥像-2と異なり、嘴他が表現されている。羽には刻線が認められる。

鳥像-2 羽と頭部・脚部を表現する部分が確認できる。羽に刻線が認められるが鑄出しは浅い。

獣像 首の一部・胴部・脚部・尾を表現する部分が確認できる。

外周部は圈線と銘帯から成る。銘帯幅は0.7cmで、銘文は「□(龍?)氏作竟真大 山」を判読することが可能である。

**外区** 内側から列線紋・鋸歯紋・連続三葉紋で構成される。列線紋の単位は約0.1cmである。鋸歯紋帯は幅0.4cmで、崩れているものを除いて65単位を確認できる。連続三葉紋は、外向と内向のものを交互に配し、欠損・錆化のより一部確認できず、14単位を確認できる。幅は0.6cmである。

**縁部** 断面形状は三角形を呈する。



第3図 禽獸画像鏡 (S=1:1)

② 罽龍鏡（獸紋鏡）【第4図】（正岡第14図）

**遺存状況** ほぼ完形で出土し、全面にブロンズ病が見られる。鏡背には赤色顔料の付着が部分的に認められる。

**鑄はだの特徴** 外区の一部は白銅質で光沢が認められるが、ほぼ全面にあるブロンズ病のため、鑄造時の痕跡はほとんど認められない。鈕孔部分に一部鑄肌が残存している。鏡表もブロンズ病のため、緑錆に覆われるが、白銅質が残存する部分には光沢が認められる。

**研磨** ブロンズ病のため確認することはできない。鏡表もブロンズ病による緑錆のため、確認できない。

**法量** 面径11.6cm 厚さ0.5cm 面反り0.3cm 重量191.33g（保存処理後）

**文様構成** 鈕を中心とし、その外側に一条の突線がめぐり、内区主紋・半円方形帯とつづく。内区主紋は四乳によって区画され、獸形四体を配する。内区外周は半円方形帯と斜面鋸歯紋・凹線から成る。外区は捩紋（羽状紋）帯と無紋の縁である。

**鈕** 鈕は径1.80cm、高さ1.0cmの半球状を呈する。鈕孔は、隅丸方形で、径は下端0.45cm、上端0.55cm。内部には一部段差が認められ、鑄造時の特徴と考えられる。鈕座は一条の突線が巡るが、数箇所ですてぎれている。鈕座径2.0cm。

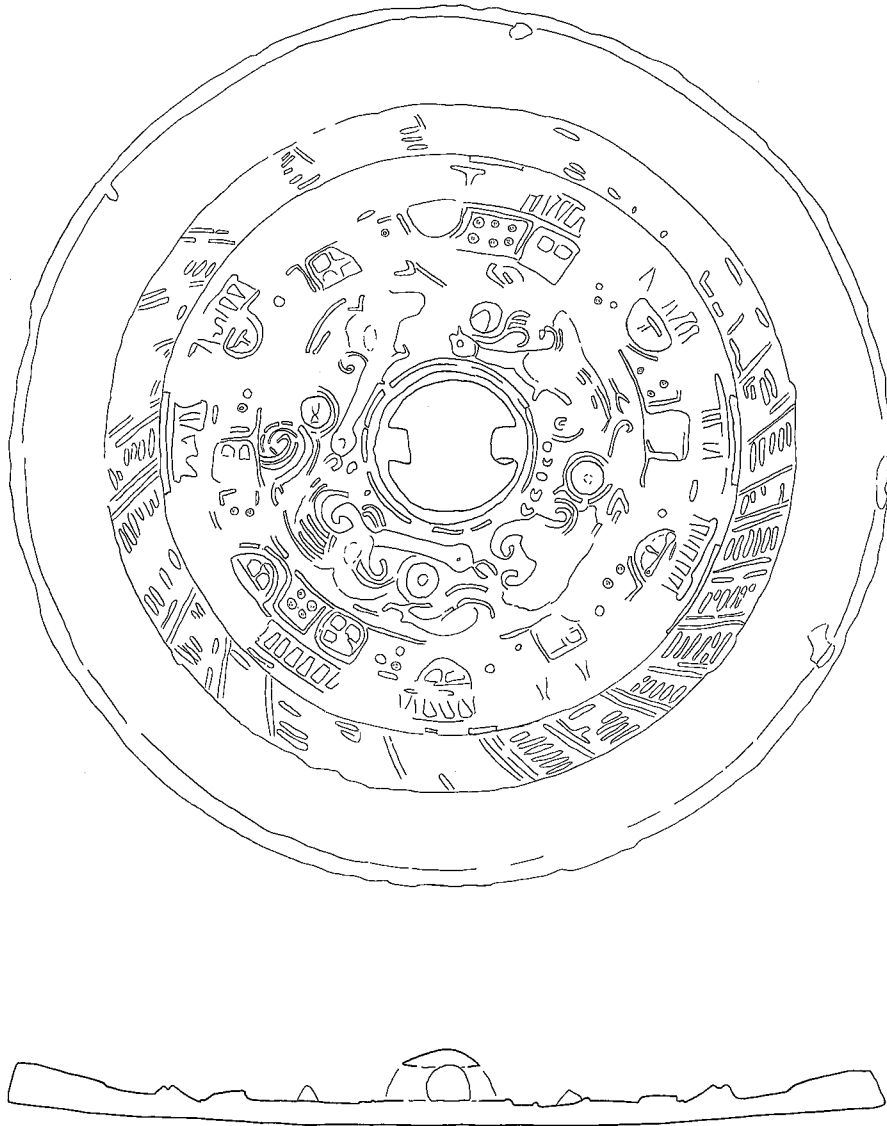
**内区** 四体の獸形と四個の乳で構成される。乳の一部には円座が認められる。乳は主紋の一部を構成していると理解できるが、獸形のどの部分を表現しているかは判然としない。三体の獸形は長い首を表現している。一体の獸形には首は表現されず、うろこ状の紋様が鑄出されている。獸形にはそれぞれ羽状の表現が認められ、一部は渦巻き状を呈する。嘴と思われる表現が三体で確認できることからこの獸形は鳥を表現したものと理解する。主紋帯の幅は1.4cm。

外周の半円方形帯は形骸化した半円6個と方形6個を交互に配し、その間には、4個から6個を一単位とする珠紋を配置する。幅は0.7cm。斜面鋸歯紋帯は錆化のため、ほとんど残存していないが、部分的に残存している。幅0.4cm。

**外区** 一条の凹線で内区と区画され、捩紋（羽状紋）と無紋の縁で構成される。捩紋帯は約1/2が残存しているが、均等に割付けられていない。一単位も5～6本と不揃いである。捩紋帯幅0.75cm。

**縁部** 幅1.0cmで、断面形状は平縁である。約1/2は白銅質で光沢を認める。

（富田）



第4図 鬮龍鏡 (獸紋鏡) (S=1:1)

## (2) 武器

現状において、剣9点、刀2点、刀剣破片10点の合計21点が残存している。

### ① 剣

#### 1 【第5図-1】(正岡第15図-1)

残存度合いが一番良好な資料である。5片を接合している。切先部を欠損しており、剣身部の多く欠損している。茎部に目釘孔を確認できる。また、木質が若干残存している。

残存長41.1cm 剣身部幅2.6~3.0cm 茎部長11.5cm 茎部幅1.3~1.7cm

#### 2 【第5図-2】(正岡第15図-2)

3片を接合している。茎部と切先端部を欠損している。剣身側面と茎部の一部に木質が残存している。鎬の稜線を剣身の一部で確認することができる。

残存長28.0cm 剣身部幅2.6~2.7cm 茎部幅3.1cm

#### 3 【第6図-3】(正岡第15図-8)

切先部の破片。残存長5.1cm 剣身部幅2.8cm

#### 4 【第6図-4】(正岡第15図-16)

切先部の破片。残存長5.2cm 剣身部幅2.6cm

#### 5 【第6図-5】(正岡第15図-4)

剣身~茎部にかけての破片で4片を接合している。茎部に目釘孔を確認できる。茎部端は約2cm折り曲げて鍛接していると思われる。

残存長17.1cm 剣身部幅3.3cm 茎部長 11.4cm 茎部幅1.2~2.0cm

#### 6 【第6図-6】(正岡第15図-5)

剣身部の破片。残存長8.3cm 剣身部幅3.0cm

#### 7 【第6図-7】(正岡第15図-7)

剣身部の破片。残存長7.8cm 剣身部幅2.7cm

#### 8 【第6図-8】(正岡第15図-13)

剣身部の破片。残存長7.3cm 剣身部幅2.7cm

#### 9 【第6図-9】(正岡第15図-15)

剣身部の破片。残存長6.7cm 剣身部幅2.2cm

### ② 刀

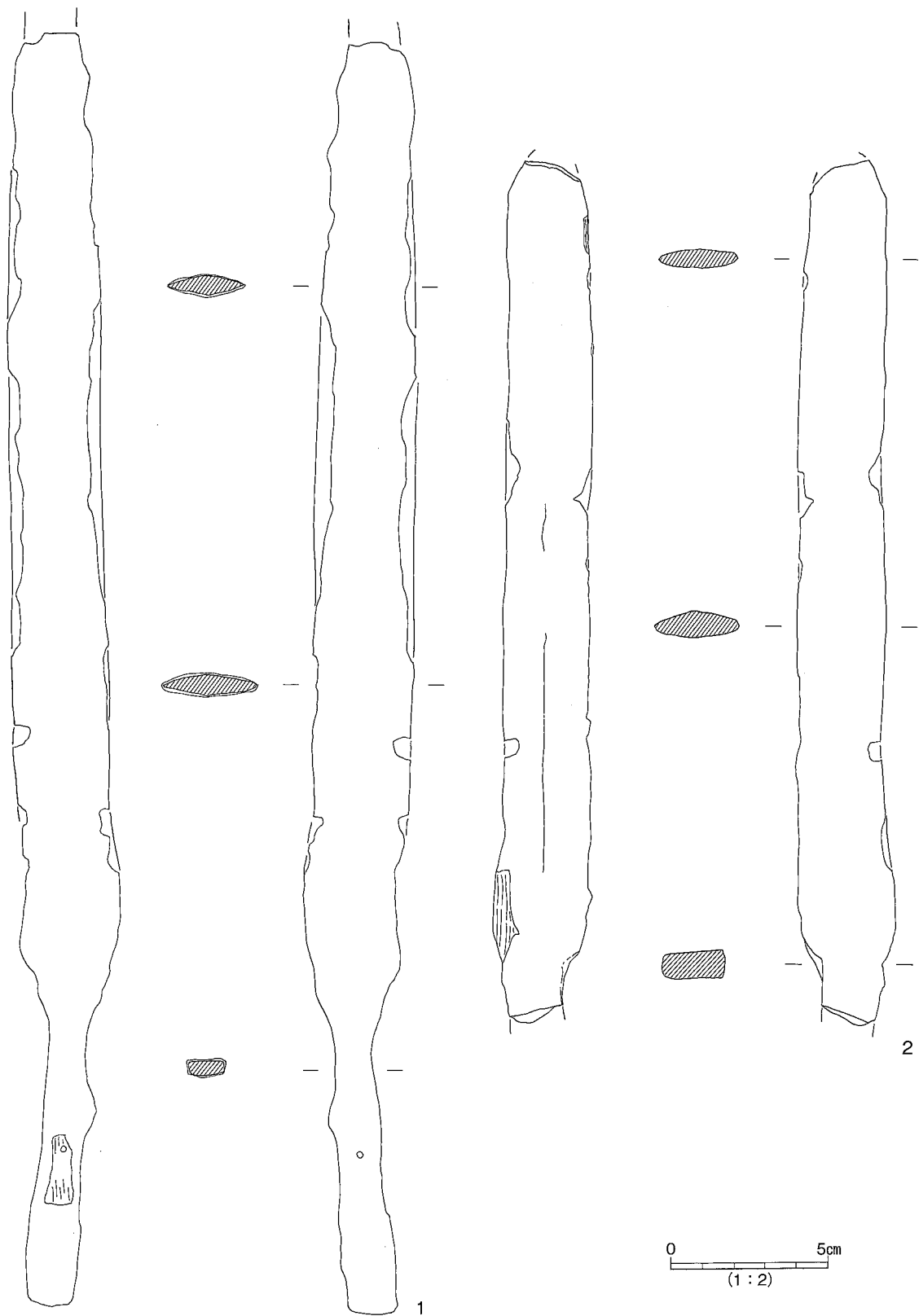
#### 1 【第7図-10】(正岡第15図-17)

刀身部の一部を欠損している破片で、3片を接合している。茎部に目釘孔を確認できる。残存長23.0cm 刀身部幅3.2cm 茎部長11.5cm 茎部幅2.3cm

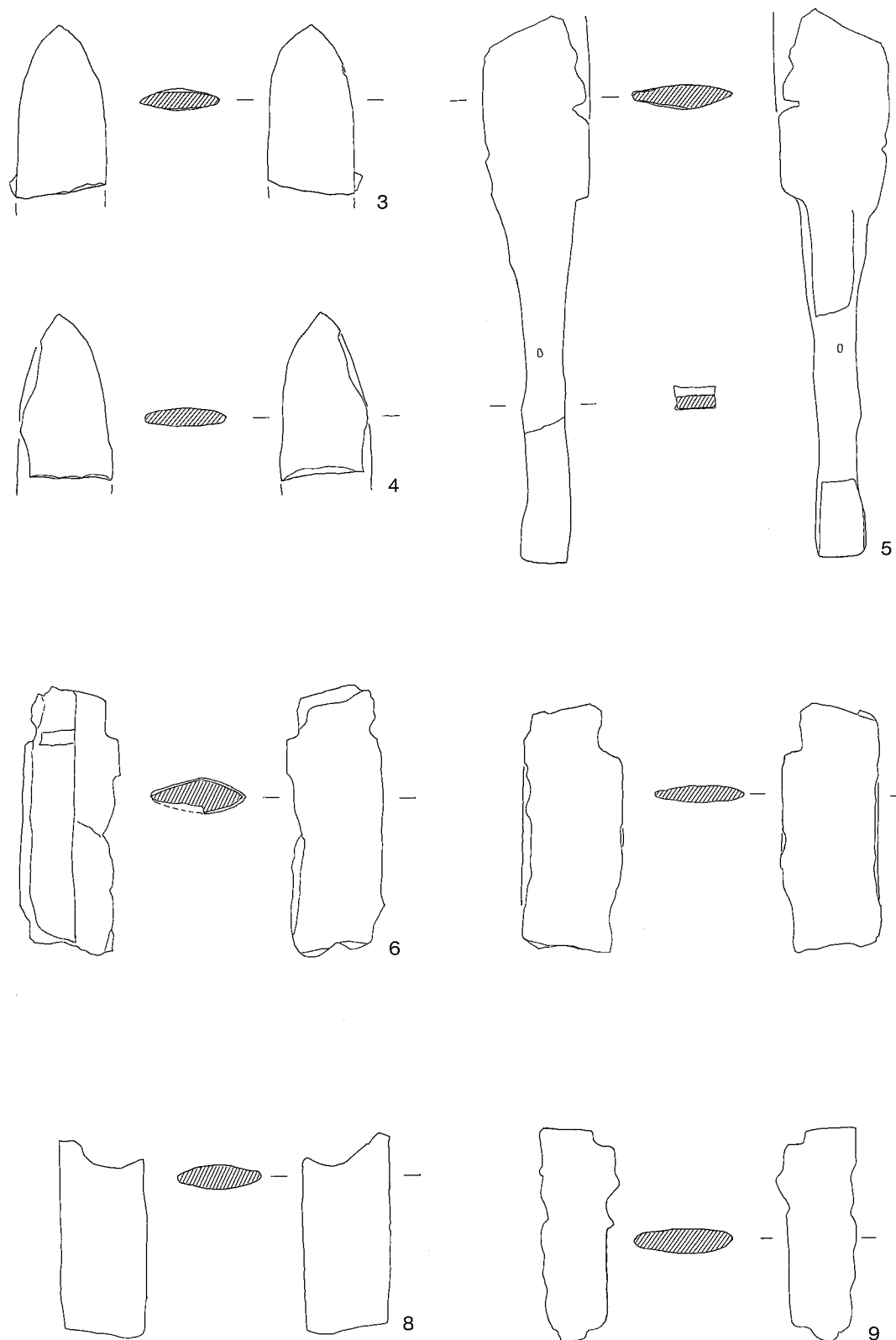
#### 2 【第7図-11】(正岡第15図-22, 23)

別個体で報告されていた資料が接合したもの。茎部から刀身部にかけての破片で茎部は関付近で屈曲する。剥落が著しく、欠損部位が多い。茎部に目釘孔を確認できる。残存長25.5cm 刀身部幅2.9cm 茎部幅2.5cm



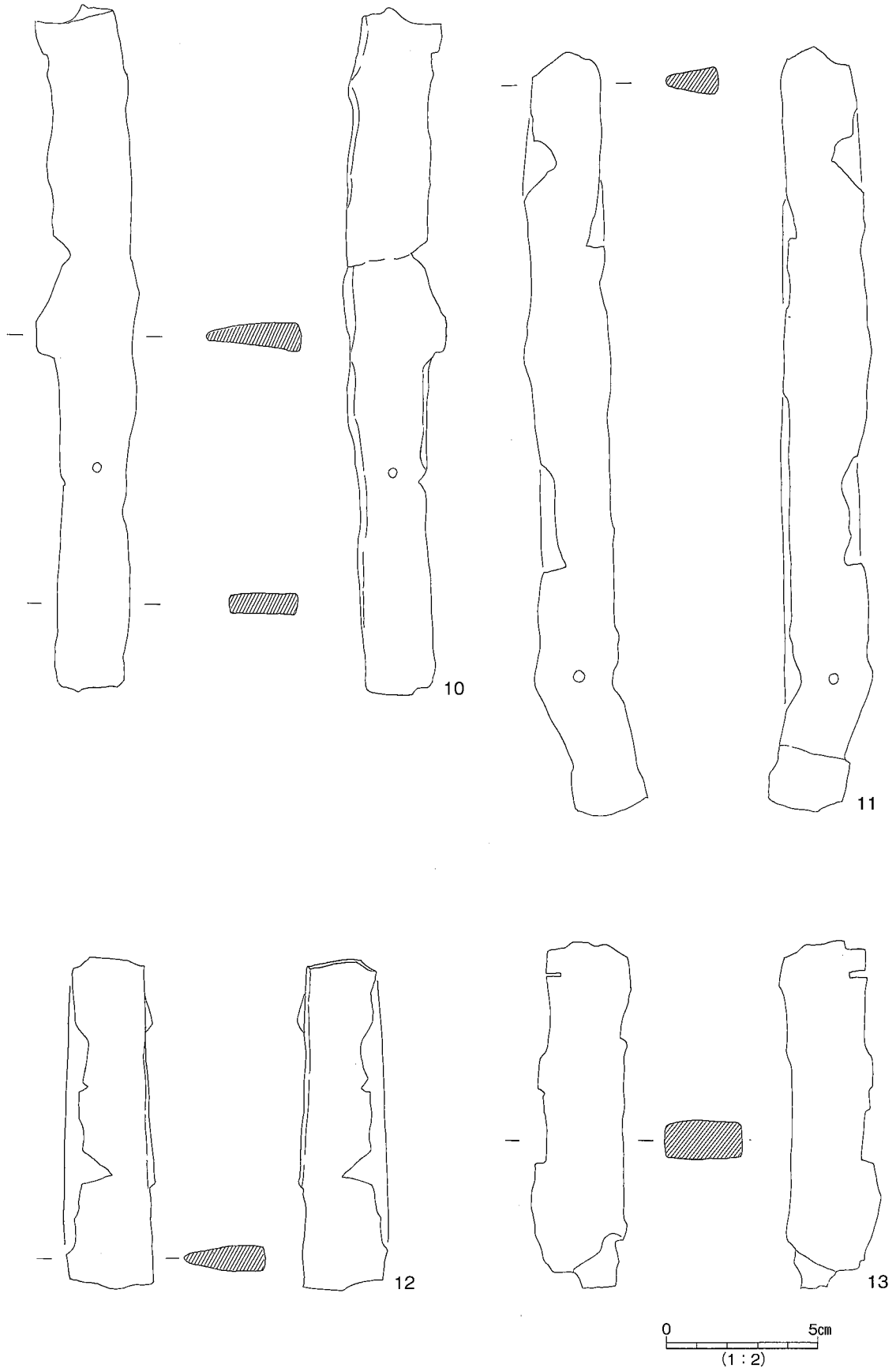


第5図 武器(1)

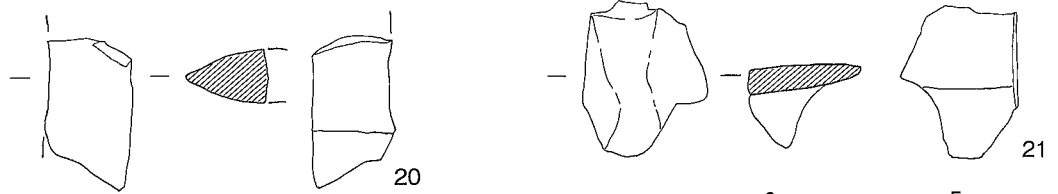
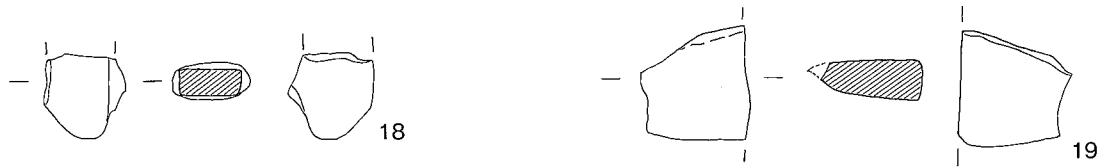
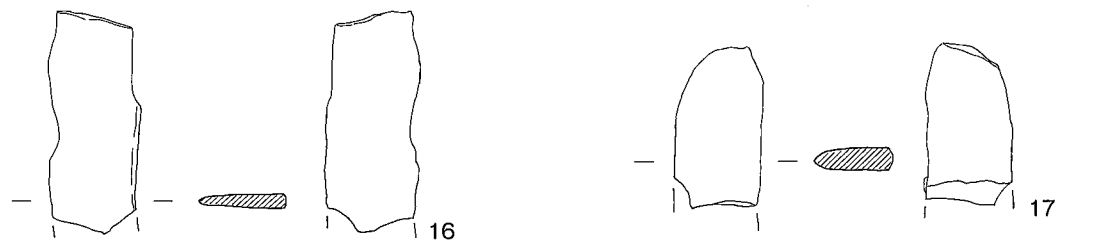
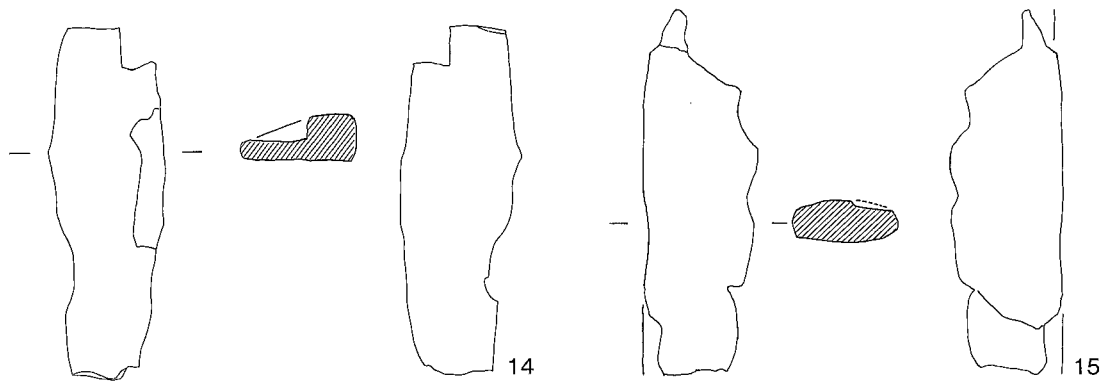


0 5cm  
(1:2)

第6图 武器(2)

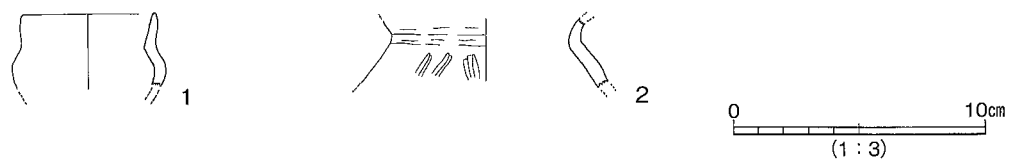


第7図 武器(3)



0 5cm  
(1:2)

第8图 武器(4)



第9图 土師器

### ③ 刀剣片

- 1 【第7図-12】(正岡第15図-18, 24)  
別個体で報告されていた資料が接合したもの。残存長11.0cm 刀身部幅2.7cm
- 2 【第7図-13】(正岡第15図-27)  
錆のため、剥落した破片を接合したもの。接合のため、断面の計測は不可能である。残存長11.6cm
- 3 【第8図-14】(正岡第15図-21)  
多くが剥落している。残存長9.2cm 刀身部幅2.9cm
- 4 【第8図-15】(正岡第15図-20)  
部分的に剥落が見られる。残存長9.6cm 刀身部幅2.8cm
- 5 【第8図-16】(正岡第15図-19)  
残存長5.8cm 刀身部幅2.4cm
- 6 【第8図-17】(正岡第15図-32)  
切先の可能性が考えられる。残存長4.2cm 刀身部幅2.2cm
- 7 【第8図-18】(正岡第15図-10)  
残存長2.2cm
- 8 【第8図-19】(正岡第15図-30)  
刃部を欠損する。残存長3.0cm
- 9 【第8図-20】(正岡第15図-31)  
刃側だけの破片である。残存長4.0cm
- 10 【第8図-21】(正岡第15図-29)  
残存長4.0cm

(富田)

### (3) 土師器

主体部出土資料として2点の壺形土器破片が確認できる。

- 1 【第9図-1】(正岡第16図-1)  
口縁部から胴部にかけての破片で、胴部でやや屈曲する。小型丸底壺の可能性が考えられる。法量は復元口径5.3cm 残存高2.5cm。色調は内外面とも明黄褐色(10YR6/6)。
- 2 【第9図-2】(正岡第16図-2)  
屈曲部から胴部にかけての破片。外面には斜め方向のヘラ磨きが施される。直口壺の可能性が考えられる。法量は屈曲部復元径7.6cm 残存残存高2.5cm。色調は内外面とも橙色(7.5YR6/6)。

(富田)

#### (4) 埴輪

相の谷1号墳では、これまでの森毅氏の詳細な検討(森 1983)により、円筒埴輪および壺形埴輪の存在が既に確認されており、朝顔形埴輪の可能性についても一部触れている。今回実見した資料はコンテナ約70箱分、破片点数は約3,500点にのぼる。但し、殆どが破片資料で、調査時に設定したトレンチおよび調査区に従って取り上げられた埴輪のほか、出土地不明の資料まで様々で、原位置に近いと思われる個体は僅か1点のみという現状である。

本節では、破片が一部接合した個体および、特徴を抽出可能な個体について88点を実測し、その報告を行うものである。その他の破片資料については、出土地点および個体の形態的特徴や器種別の分析を行ったので、考察編にて詳述することとしたい。

##### ① 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1~44)

1~5は口縁部である。1は口縁端部が欠損するが、復元口径は約34cmと考えられる。口縁部は直立し、端部が短く外反する。突帯は1.4cmと高めで中央部がやや窪む。外面には8本/cmの細かい断続ヨコハケを施す。2は復元径35.0cmを測り、口縁部形状が1と類似し、端部が短く屈曲するものである。突帯は剥離するが、剥離面に設定工具痕などは認められない。

3・4は大きく外反しながらのびる個体で、3の口縁端部は屈曲し、上端に平坦面を有する。4は復元径48.0cmと大型で、内外面ともに10本/cmの非常に細かな断続ヨコハケを施す。

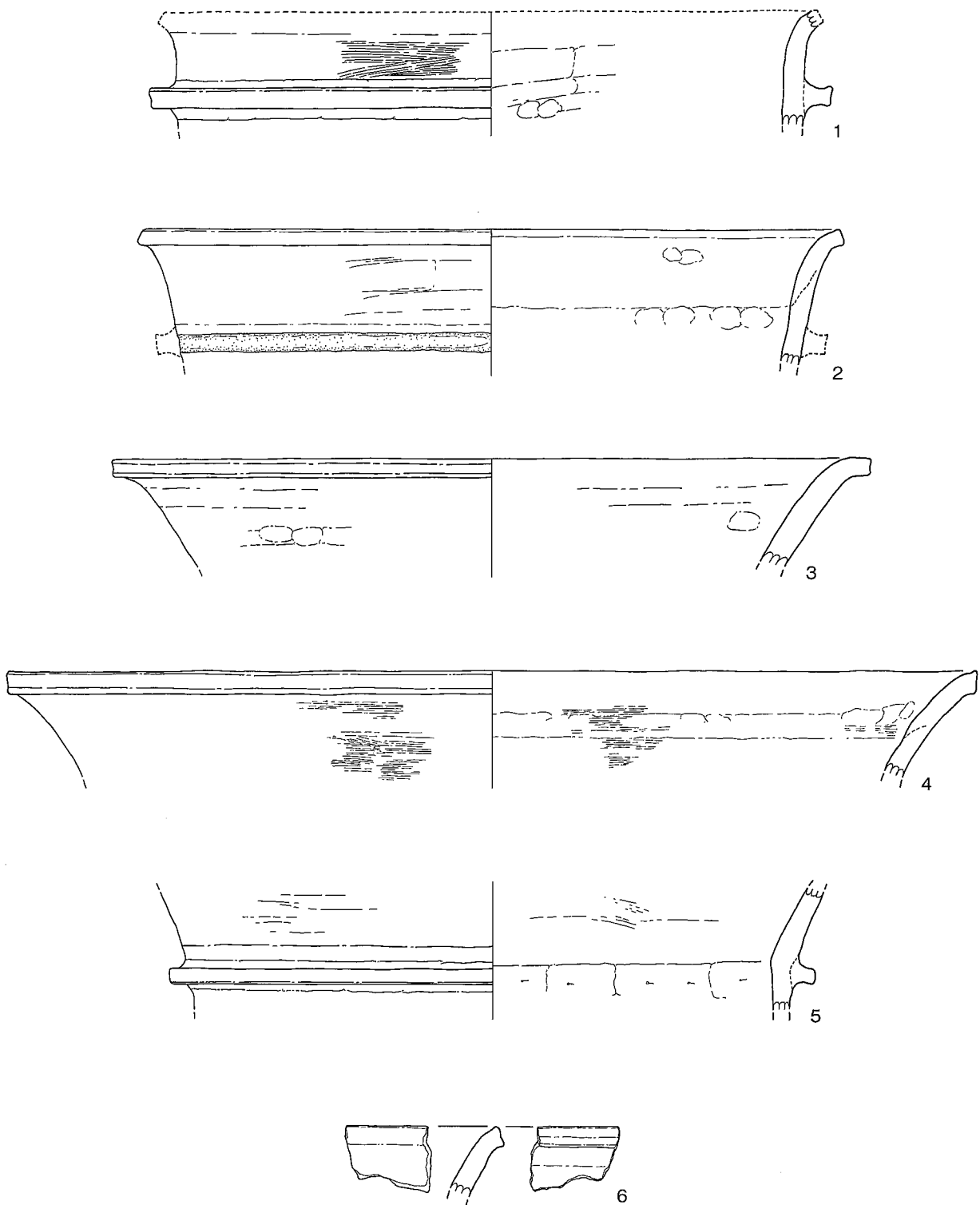
5は口縁端部へと続く胴部片で、大きく屈曲し外傾する口縁を有する。突帯は断面長方形で窪みは認められない。屈曲部内面には横方向のケズリが顕著である。6は口縁端部の破片で、ナデにより端部が尖り気味である。口縁部片にはいずれも赤色顔料の塗布が認められる。

7~10は胴部外面に鋸歯文および放射状の線刻が認められる個体である。7は原位置に近い地点で確認された個体で、胴部および突帯は全周する。突帯径は40.0cmを測り、幅8cm程度の方形スカシが4方向に穿たれる。突帯はやや高めで、ナデにより端面が窪み、上端が突出気味である。突帯中央および上下には、幅4mm程度の小型竹管文が認められる。胴上部には右上がりの鋸歯文が連続して施され、下部には放射状の線刻が確認できる。器面には黒斑および赤色顔料が残る。8は7の胴下部に相当する個体と考えられる。長方形スカシの側面には二重の線刻が刻まれ、上部(おそらく突帯下部)には小型竹管文が認められる。器面には放射状の線刻が施される。

9・10は左または右上がりの鋸歯文が認められるが、7と比較してやや小型である。9は突帯がナデにより大きく窪み、下端が突出気味である。10は左上がりの鋸歯文を有し、方形スカシ下部には線刻枠が刻まれる。突帯形状は方形に近く、僅かに端面がナデで窪みを有する。

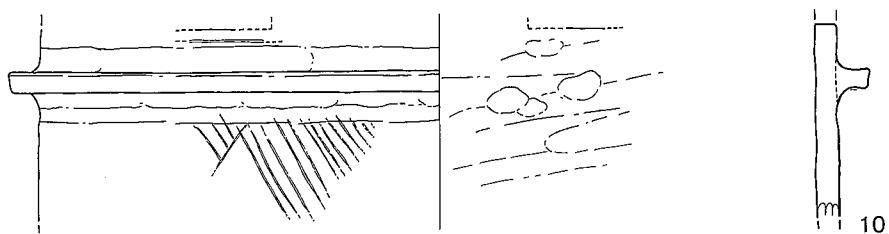
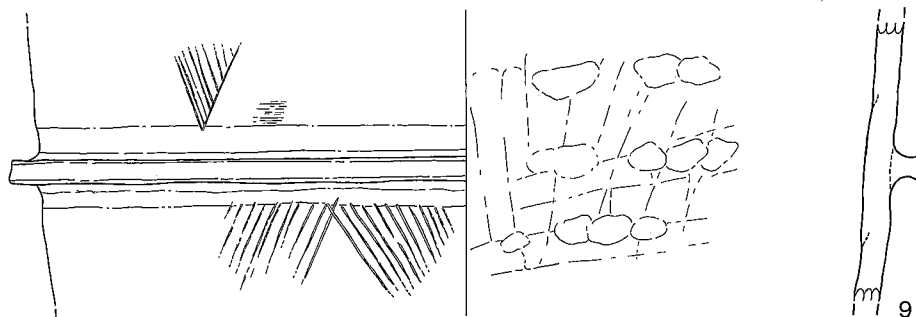
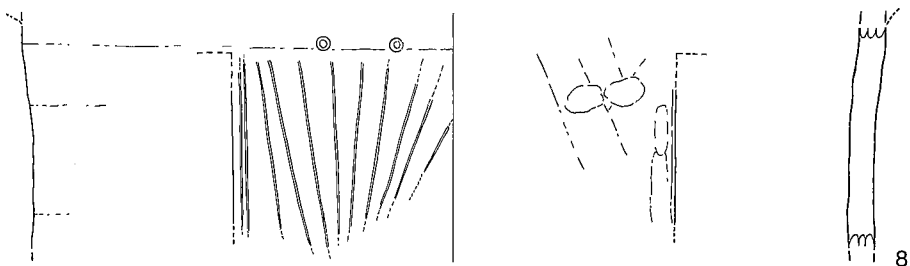
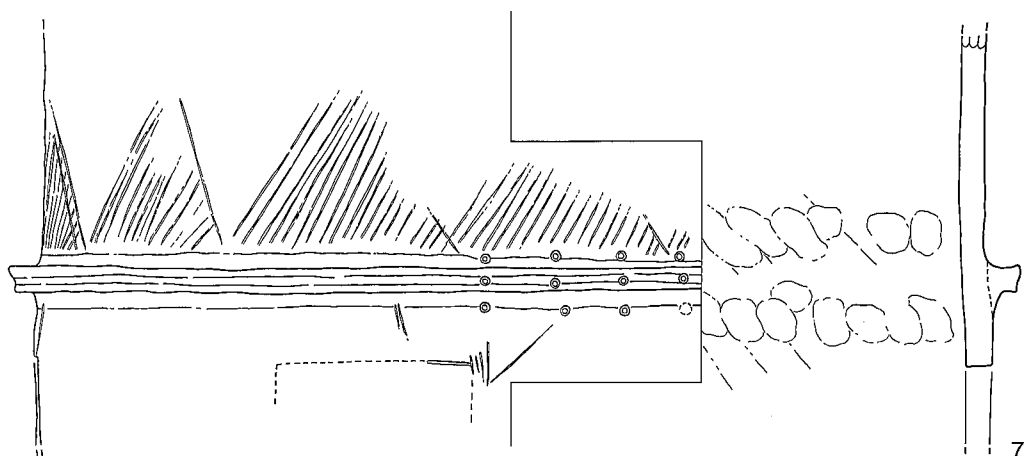
11~16は幅8mm前後の大型竹管文が1個または2個単位で認められる個体である。11は方形スカシが認められ、器面に平行線刻が刻まれる(鋸歯文の可能性もあり)。突帯高1.4cmと高く、ナデにより上下端が尖り気味である。12は2個単位の竹管文が突帯を挟み上下で認められる。13には方形スカシ周囲に平行線刻が認められ、線刻枠の可能性がある。突帯は上端が大きく突出する。14は大型竹管文が1個単位で等間隔に認められる個体である。突帯は幅広で台形気味の断面形を呈する。

15・16は2個単位の大型竹管文に加え、8~10本/cmの断続ヨコハケおよびタテハケが認められる



0 10cm  
(1 : 3)

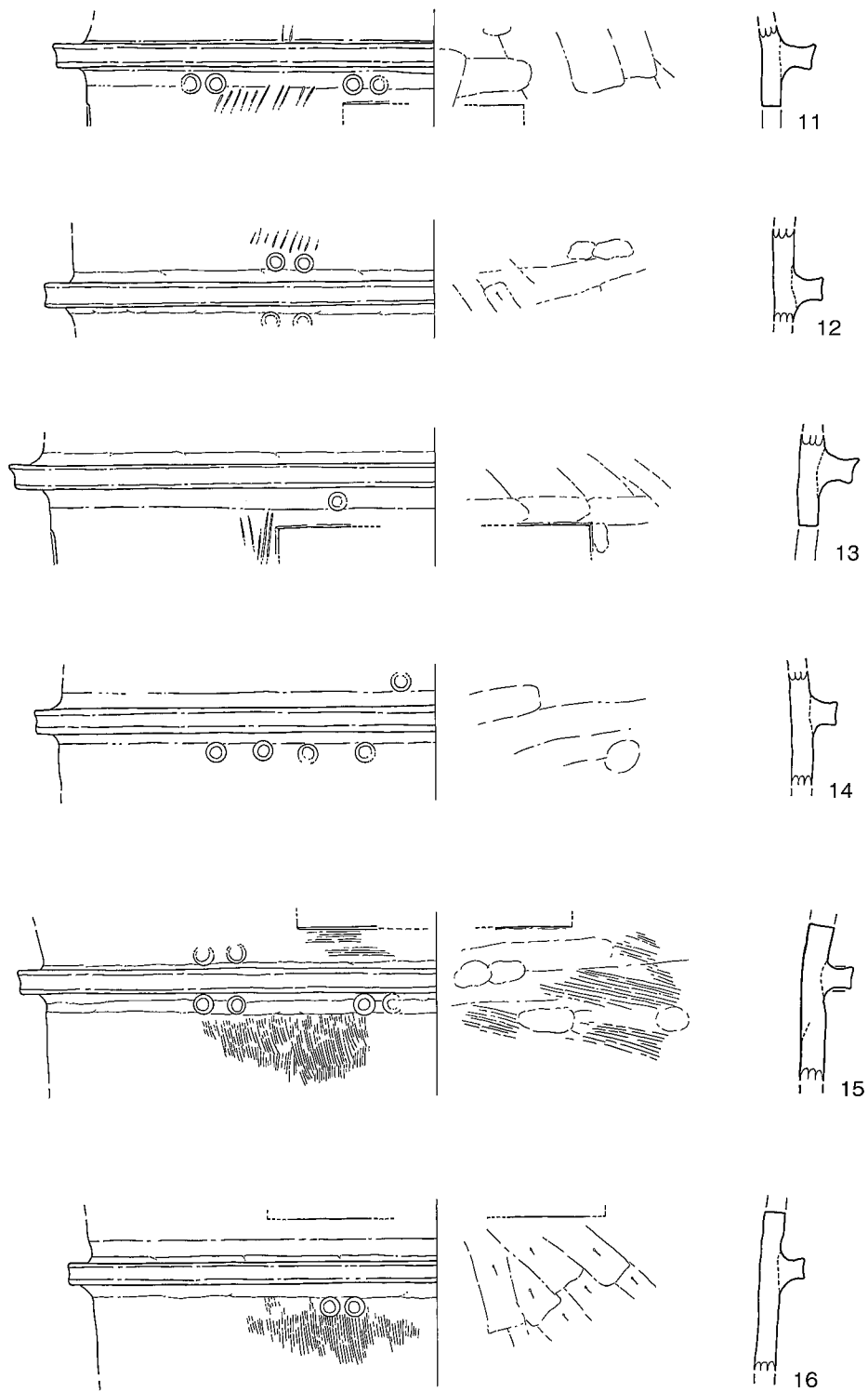
第10図 埴輪 (1)



0 10cm  
(1 : 3)

第11图 埴輪 (2)





0 10cm  
(1 : 3)

第12図 埴輪 (3)

個体である。方形スカシと突帯の間には竹管文は認められず、16の内面のようにケズリが認められる場合もある。突帯は上下が窪むが、それほど突出はしないものである。

17は突帯径29.2cmを測る、やや小型品である。突帯は上下が窪むが断面方形を呈し、器面には右上がりの平行線刻が施される。突帯下部には平行する形で線刻が認められる。

18～22は器面に8～10本/cmの細かな断続ヨコハケ・ナメハケを施す個体である。18は断面台形状を呈する高い突帯を有し、胴上部には左上がりの平行線刻が認められる。19も突帯が高く、上下端が突出するもので、黒斑および左・右上がりの線刻(中には二重線刻あり)が認められる。20は下方に胴部が開き気味になる個体で、上下に尖る突帯を有し、器面には縦方向に二重線刻が刻まれる。21・22も胴部が下方へ開く形状を呈しており、21には鋸歯文が認められる。21・22とも胴下方がやや膨らむ形状で、器壁も厚くなるのが特徴的である。22には方形スカシが穿たれる。

23は方形スカシを有し、突帯は上下端が大きく突出する。器面にハケ調整は施されない。24は器壁が0.6～0.7cmと非常に薄く突帯幅が広い。上端がナデにより大きく尖り、突帯貼付時の指オサエ痕が明瞭に残る。内面には縦方向の板ナデが強く残り、8本/cmのハケ調整も認められる。

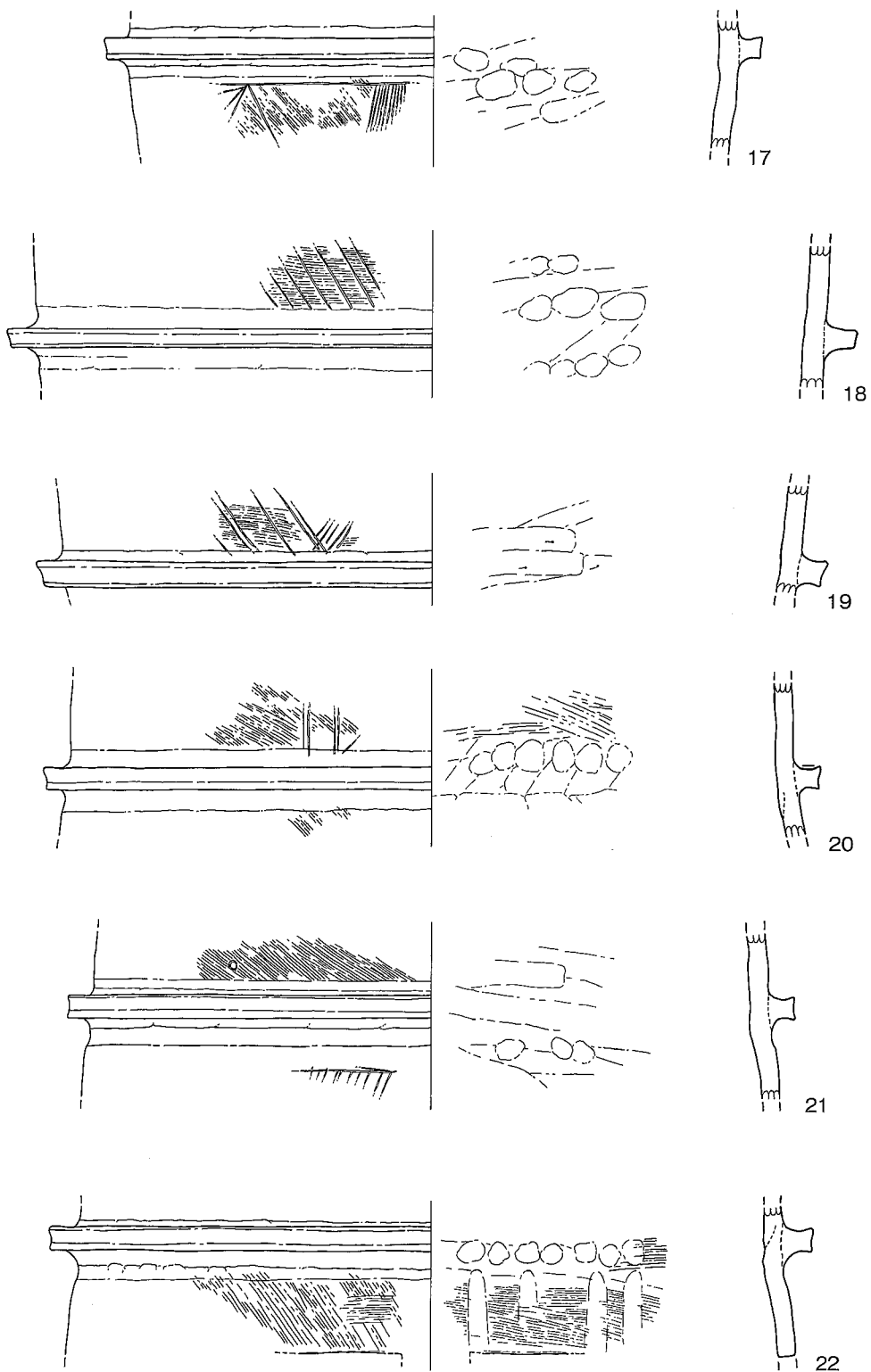
25～28は器壁0.6～0.8cmとやや薄く、器面には8～10本/cmの断続ヨコハケを施し、鋸歯文が認められる一群である。25は大きく外傾し、上方に向かって器壁を薄くする。右上がりの鋸歯文を施し、突帯は幅狭で突出する。ナデによる窪みはあまり認められない。26は25と同様に突帯幅が狭く、方形スカシが認められる。鋸歯文は右上がりやや粗雑に刻まれる。27・28は大きく下方に開く個体で、突帯高1.4～1.6cmと高めで上端が突出し、やや突出部を上方に向ける。突帯下部に右上がりの鋸歯文が刻まれ、28には線刻枠らしき直線文が認められる。

29～33は朝顔形埴輪と思われる個体である。29・30は突帯径23.8～27.5cmと小型の個体で、突帯は鏝状に大きく突出する。上部はやや窄まり気味で、端面はナデで窪まず丁寧に貼付されている。30には半円形の割り込みが認められる。

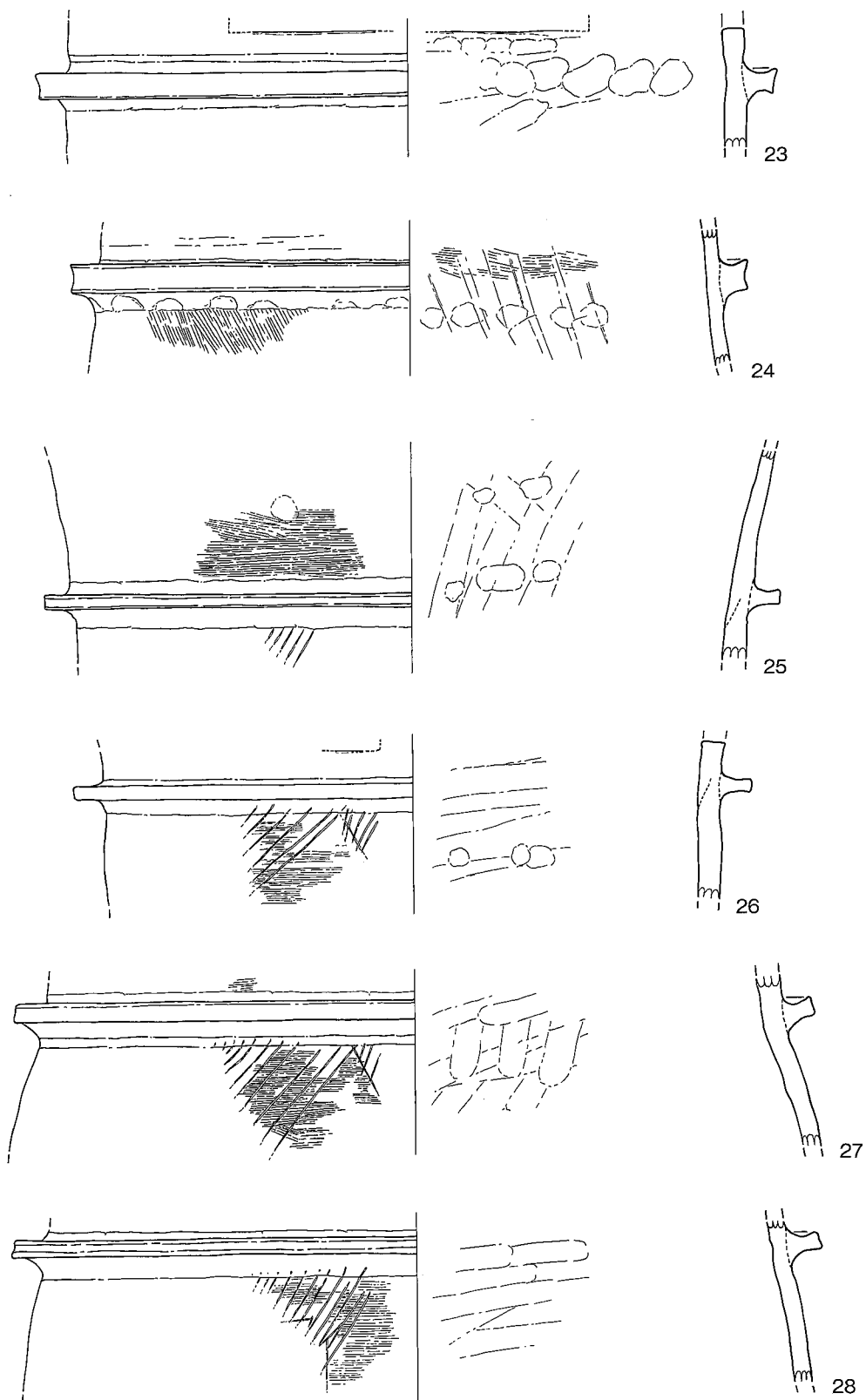
31～33は器壁厚が0.8cmと薄く、中間で上方に大きく屈曲する突帯を貼付する一群である。31は長方形スカシを有し、器面には10～12本/cmの断続ヨコハケを施す。突帯はやや厚めで一部欠損する。32・33は31より突帯が厚手であり、貼付時の内面指オサエ列が顕著に残る。突帯屈曲部の上端は欠損するが、本来はかなり大きく屈曲するものと考えられる。器面には赤色顔料が認められる。

34～37は円筒埴輪の胴部片と思われる。34～36は長方形スカシに線刻枠の認められる一群である。34は器壁のカーブが少なく、形象埴輪(盾)の可能性もあるが、ここでは円筒埴輪の一部としておく。2条単位の線刻がみられ、外面には10本/cmの断続ヨコハケが施される。35・36にはスカシ枠に2条単位の線刻が認められるが、35は2重、36では3重がほぼ平行して並ぶ。内面には指ナデおよび指オサエがみられ、表面には赤色顔料が塗布される。37は器壁が薄く、4～5本/cmの粗めのタテハケが部分的に認められる。

38は器種の断定は出来ないが、鱗状を呈する個体である。器面には指オサエが連続的に認められ、突帯は上方に屈曲する。破片自体は平坦で、両端は粘土を強く貼り付けた痕跡が残る。突帯上部の面には赤色顔料が塗布され、円孔らしき痕跡も部分的に残る。

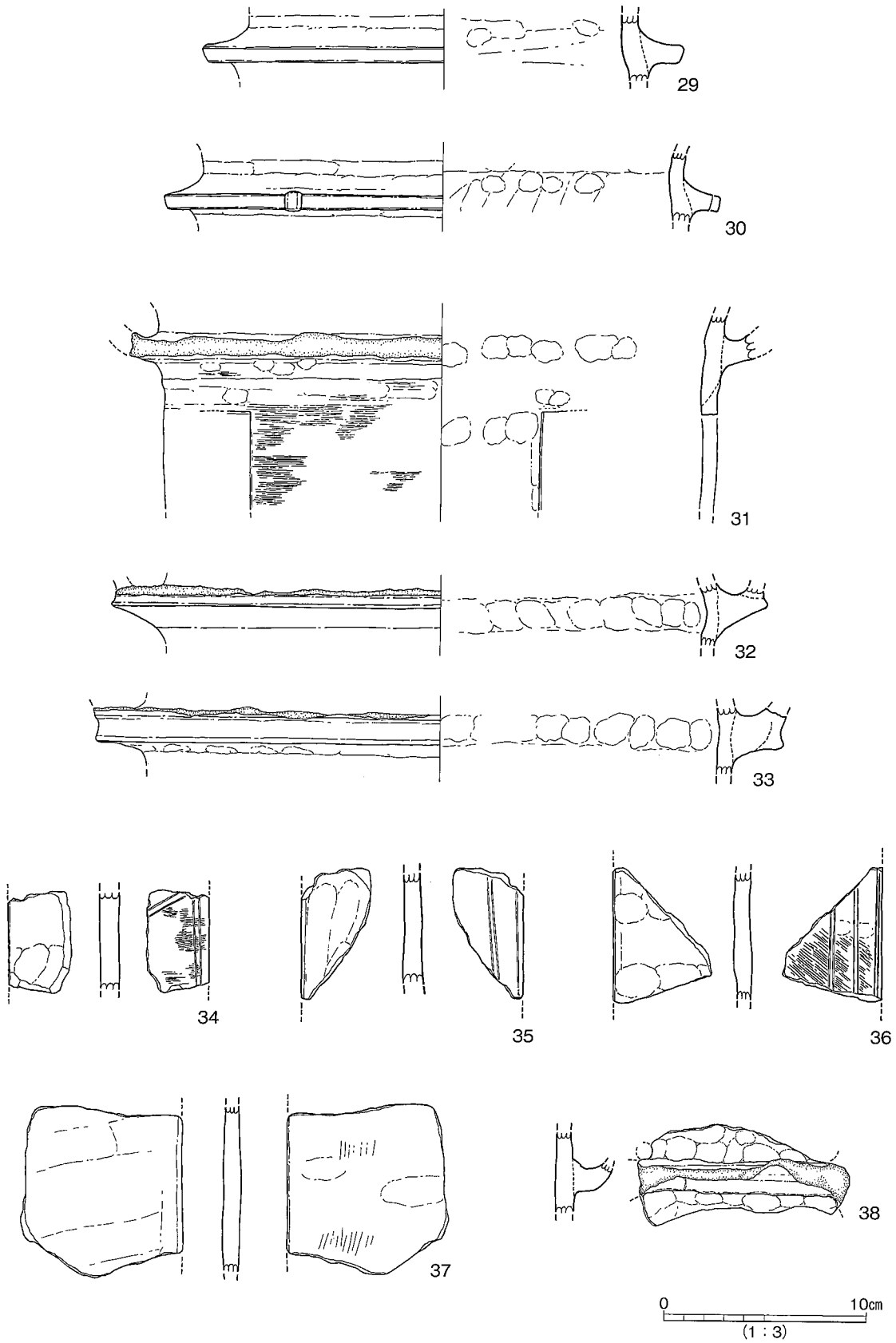


第13図 埴輪 (4)

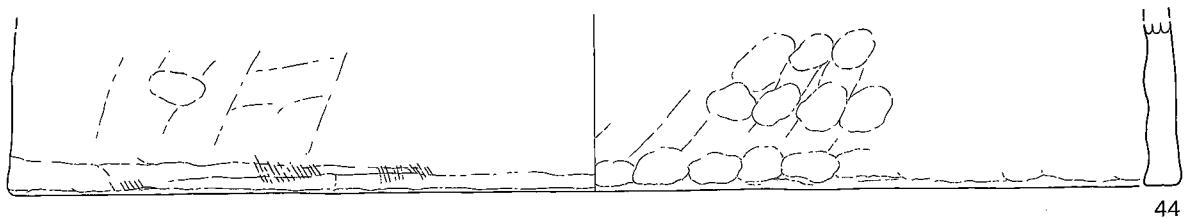
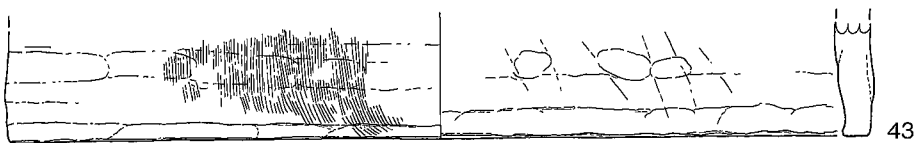
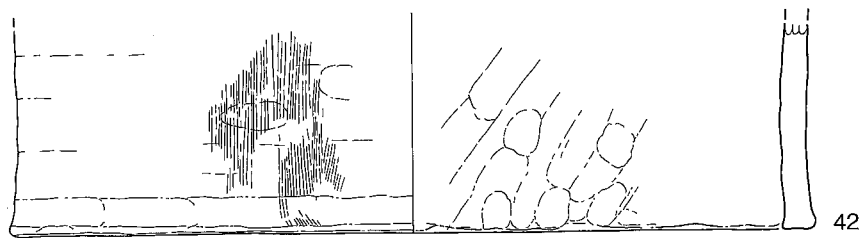
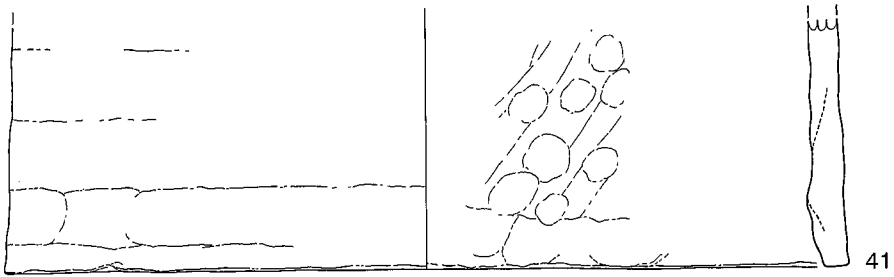
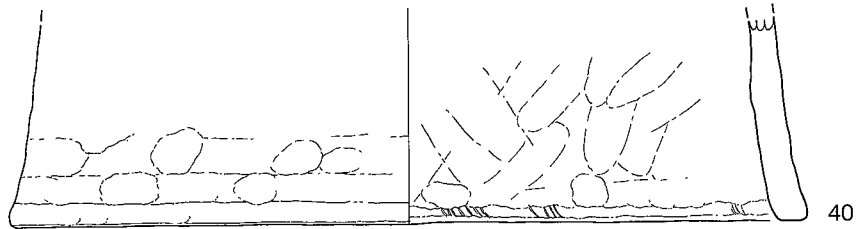
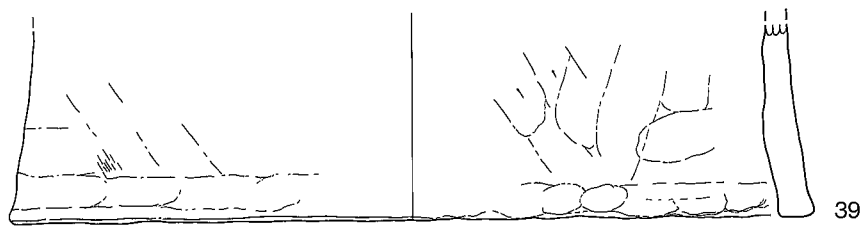


0 10cm  
(1:3)

第14図 墳輪 (5)



第15図 埴輪 (6)



0 10cm  
(1 : 3)

第16図 埴輪 (7)

39～44は基底部である。39・40は基底部径31.2cmを測り、底端部に向かって「ハ」字形に開く。内外面には指ナデ・指オサエがなされ、基底部端は自重による潰れは認められない。39の外面には黒斑があり、40には置き台の痕跡である木目痕が顕著に残る。41はやや直立気味で、基底部端は指オサエによりやや窪む。42・43は外面に8～10本/cmの細かなタテハケが認められる個体である。42は基底部端がやや潰れるが、外面指ナデ、内面指オサエで消した痕跡が残る。器壁は薄めである。

44は基底部径46.0cmを測る、やや大型の個体である。基底部端付近の外面には10本/cmのタテハケ、内面には指オサエが連続する。自重による潰れは殆ど見られず、42～44には黒斑が認められる。

## ② 壺形埴輪 (45～88)

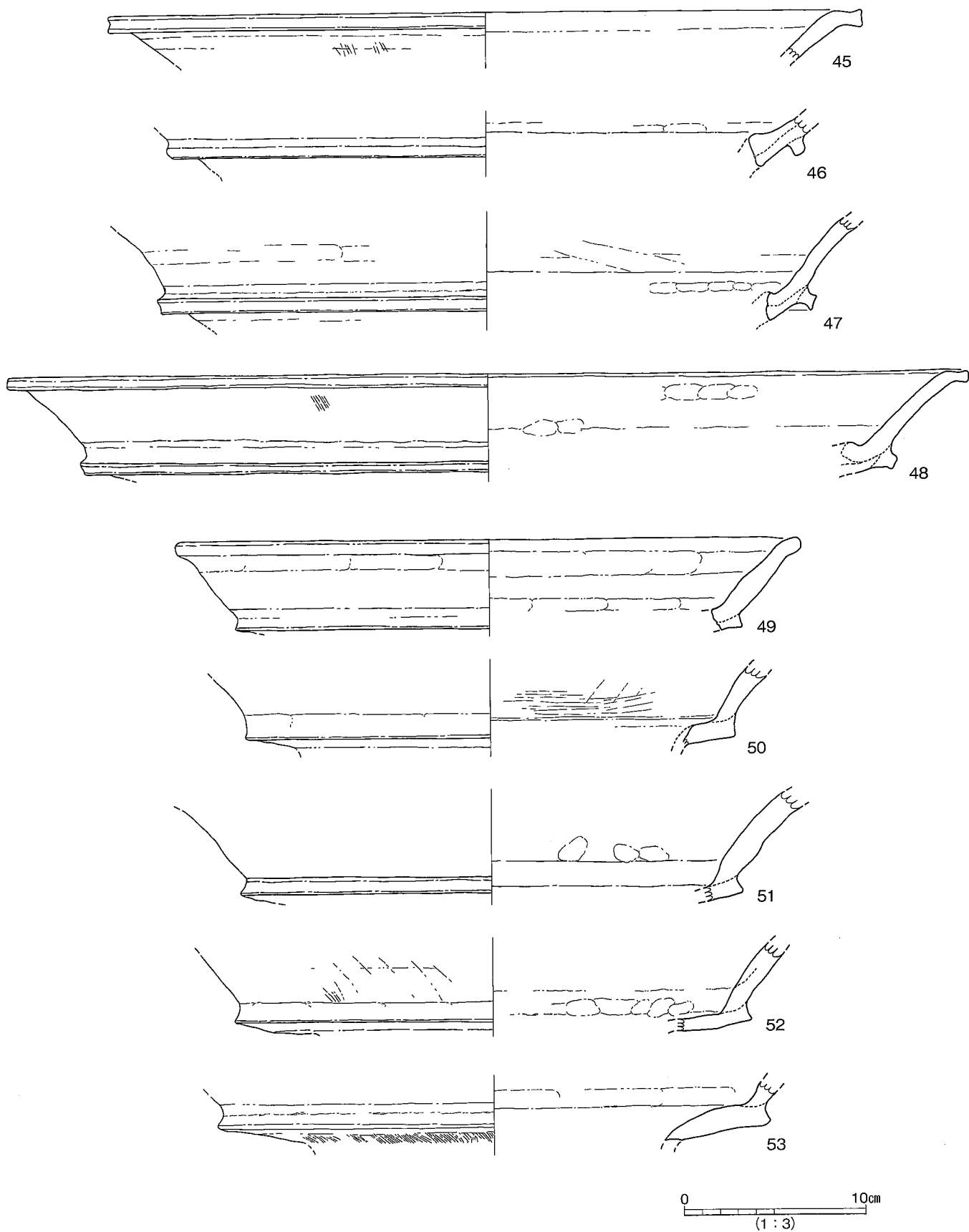
45～48は二重口縁状を呈する壺口縁部であるが、朝顔形埴輪の可能性が考えられる一群である。45は復元口径で41.6cmを測り、口縁端部はやや上方に摘み上げる。端部上面には幅1.5cm程度の平坦面(若干窪む)を有する。46・47は二重口縁状の屈曲部付近である。剥離面から粘土紐の接合は確認出来るが、実際には断面台形状の突帯を巡らせることで二重口縁を強調している。内面には指ナデ・指オサエが残り、突帯から頸部との接合部までの距離は短いと思われる。48は口径53.0cmを測る大型品である。口縁部は直線的に外傾しながらのび、端部をやや丸くおさめる。端部上面には幅1.5cmの窪みが認められ、粘土接合部に断面台形状の突帯を巡らせ二重口縁を強調する。外面には僅かに8～10本/cmの細かなタテハケが施される。

49～57は二重口縁を呈する壺形埴輪の口縁部である。49は復元口径34.6cmを測り、口縁端部は丸くおさめるが外側に屈曲が見られる。二次口縁部は中央部で器厚1.3cmと厚みを持ち、やや突出した擬口縁の上に乗るような形で接合している。器面にはナデ調整のみで、ハケ工具痕は認められない。50～53は二次口縁との接合部である。50～52は二次口縁の中央部が厚みを持ち、擬口縁は比較的平坦なもの(50)と、大きく外方に突出するもの(51～53)が存在する。52・53は頸部から一次口縁が大きく屈曲して5cm前後の水平面を有し、板ナデおよび10本/cmのタテハケを施す。

54～57は二次口縁部に竹管文および線刻が施される一群である。54は幅7mmの竹管文が1個単位で施されており、上部には左上がりの平行線刻(鋸歯文か)が認められる。擬口縁は大きく突出しており、二次口縁の中央部は器壁厚1.2cmと厚みを有する。55は幅9mmの大型竹管文が2個単位で施されており、二次口縁部の肥厚が顕著である。擬口縁の突出度は54と同様だが、端部がやや丸い。

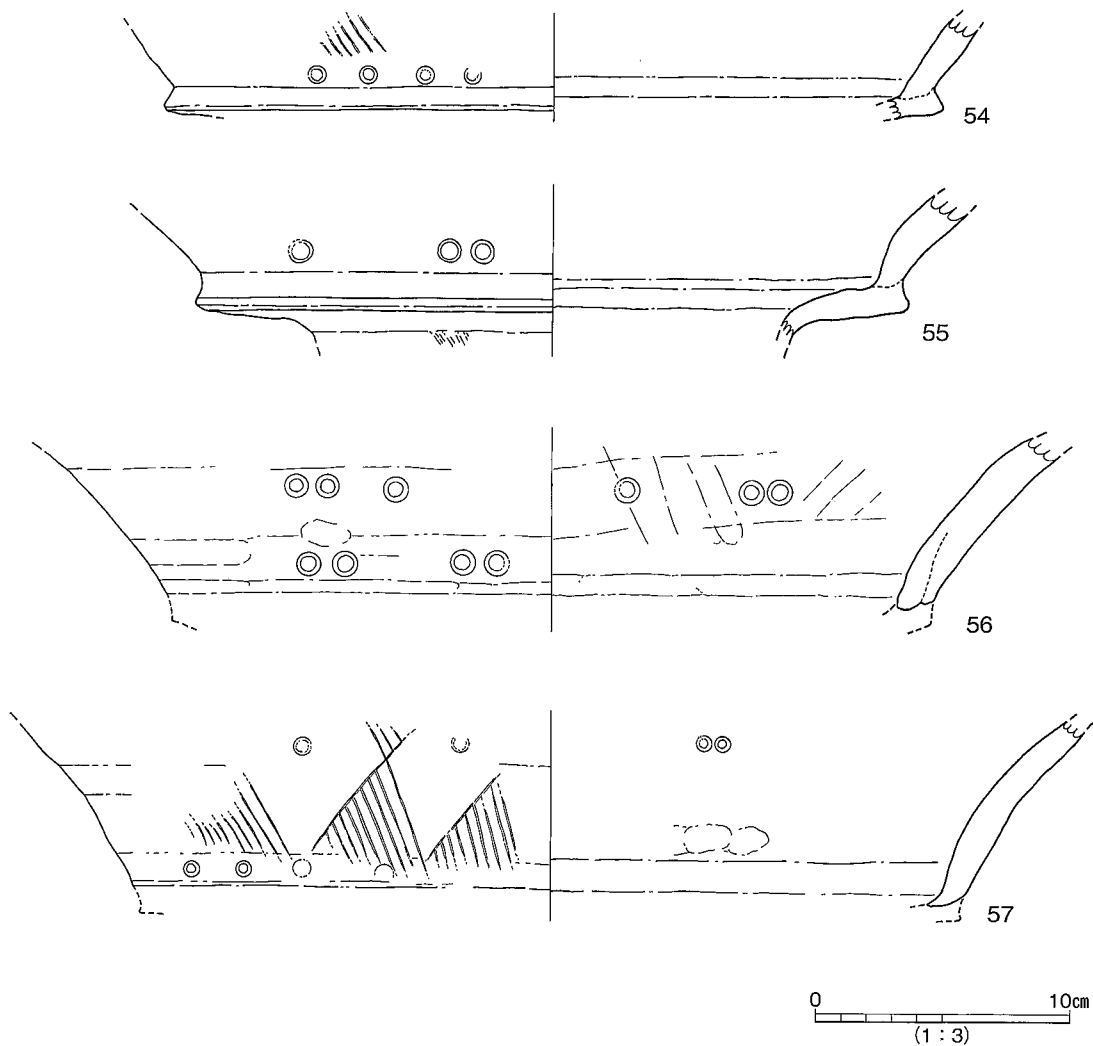
56・57は口径45cm以上を測るとされる大型の二重口縁壺である。二次口縁部は全体的に厚みがあり、やや外反気味である。擬口縁との接合は剥離しているが、56は部分的に粘土接合痕が確認出来る。いずれも内外面に竹管文が施されるが、56は9mm幅前後の原体で施文され、2個単位を基本としているのに対し、57は6mm幅前後の小さな竹管文が認められる点で異なる。また、57は外面に左上がりの連続鋸歯文と竹管文がセットになり文様構成されるが、内面には2個単位の竹管文のみで装飾される。器面調整には指および板でのナデが用いられる。

58～61は単純口縁を呈する広口壺の口縁部である。58は口径23.6cmと小型品であり、大きく外傾しながら端部付近で屈曲し、幅4cm程度の平坦面を有する。上端部はナデにより摘み上げられ、端面が窪みを持つ。外面には8～9本/cmのタテハケが施される。59・60は58よりやや大型ながらも、口縁



第17図 埴輪 (8)



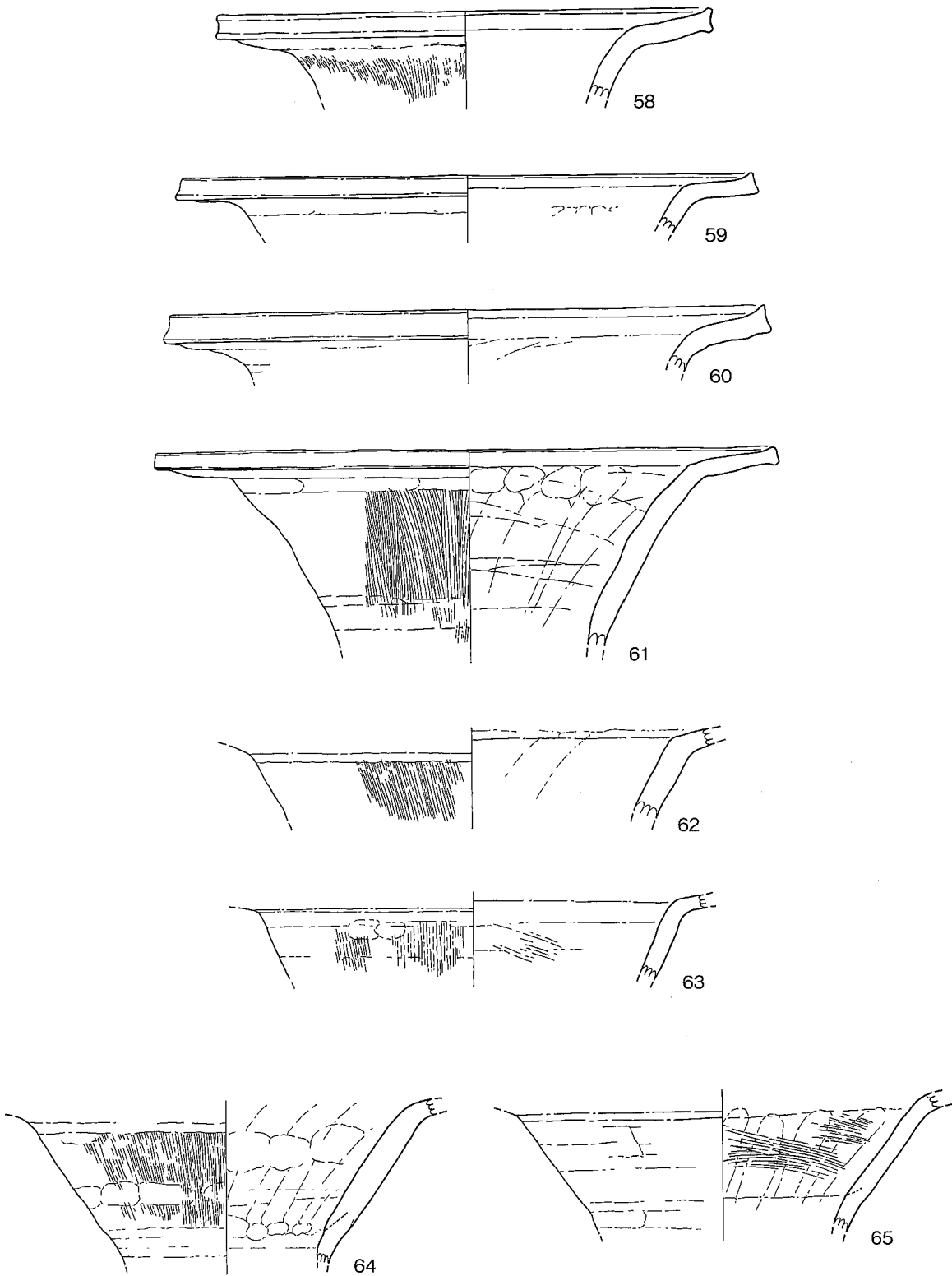


第18図 埴輪（9）

端部の形状および端部付近の平坦面など、共通した特徴を有する。61は口縁全体が復元できる個体で、外傾する口縁部から端部付近で大きく屈曲し、幅4 cm程度の平坦面を有する。端部に向かって器壁が薄くなり、上端面は大きく突出せず端面は平坦である。外面には8～10本/cmのタテハケ、内面には指オサエ列および縦方向のナデ調整が認められる。胴部との接合部は不明であるが、下端がやや先細りになる点から、それほど離れていないと推測される。

62～70は壺頸部の破片資料であるが、二重口縁が単純口縁かの判断は困難である。62・63は口縁部が大きく屈曲するもので、外面には8～10本/cmのタテハケが施される。63の内面には板ナデ調整が認められる。

64～69は頸部および胴部との接合部付近の個体である。64は大きく開く口縁部を有し、端部付近で屈曲する様子が見て取れる。頸部下端は粘土接合痕が明瞭に確認でき、屈曲部からのびる粘土の立ち上がり部と内傾接合する。接合部内面は指オサエが連続して認められ、外面は10～12本/cmのかなり細かなタテハケが施される。また、器面の凹凸からも粘土の接合状況が把握できる。65・66も同様の



0 10cm  
(1:3)

第19図 埴輪 (10)

調整および頸部接合手法が認められ、指オサエ・指ナデ痕が顕著に残る。

67・68は粘土接合痕が良好に観察できる個体である。やや外反気味に頸部が開き、下端には屈曲部からのびる器壁0.6mm前後と非常に薄い粘土紐の立ち上がりが認められる。接合方法は内傾接合で、貼り付けの際に細かな連続指オサエや板ナデが施されている。外面には横方向のナデが顕著で、67は頸部が長く、68はやや短頸で器壁が厚めである点が特徴的である。

69・70は胴部との接合部に突帯を貼付すると思われる個体である。69は胴部からの器壁の薄い粘土紐の立ち上がりに内傾接合して頸部がのびる。頸部中央部の器壁は厚く、68と同様、短頸になる可能性が高い。外面下端には突帯の剥離痕が認められ、一部には突帯が残存する。剥離痕には細かなタテハケが見られ、突帯上部には9mm幅の竹管文が2個単位で施される。70は薄い立ち上がりを有しない頸部である。直線的で長めの頸部を有し、器壁厚1.0~1.4cmと比較的厚めで一定している。内面下端には連続指オサエ列、上部には縦方向の指ナデが認められる。外面下端には突帯が剥離したと思われる痕跡があり、おそらく71のような屈曲部に連続するものと思われる。

71~77は突帯を貼付する屈曲部である。71は屈曲部から頸部にかけて大きく膨らみ、器壁厚1.7cmに達する個体である。屈曲部内面には連続的な指オサエおよび指ナデにより面を有し、小さな立ち上がりに内傾接合により頸部を貼り付ける。屈曲部には断面三角形の突帯が認められる。

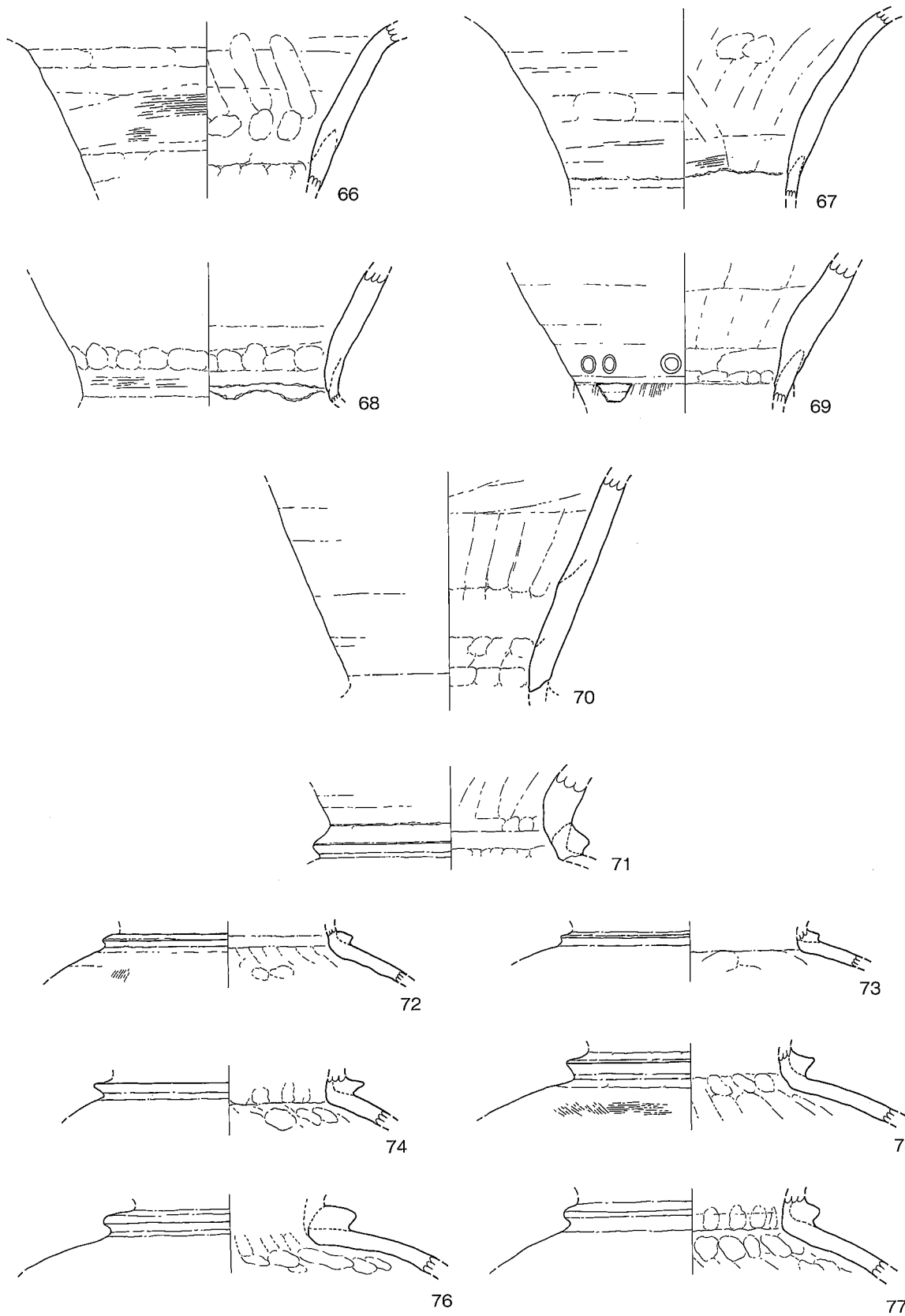
72・73は屈曲部に小さな断面三角形の突帯を貼付し、肩部が大きく張る形状を呈する。器壁は0.6cm前後と薄く、上方に粘土紐を立ち上げる屈曲が認められる。74・75は鋭く尖った突帯を屈曲部に貼付する個体である。屈曲部内面には連続指オサエ列による面が認められ、小さな粘土立ち上がり痕が上方にのびる。75の肩部外面には8本/cmの細かな断続ハケが施される。76・77はやや器壁が厚く、肩部の張りが非常に大きな個体である。屈曲部付近は締まり、外面に厚めで丸みを帯びた突帯を貼付する。肩部内面の指オサエが顕著で、77の内面では連続指オサエ列が面を形成しており、屈曲して頸部へのびる、器壁の薄い粘土立ち上がり痕も確認できる。

78~80は屈曲部に突帯を持たない個体である。いずれも器壁は0.5~0.8cmと薄く、屈曲部で大きく上方もしくは「く」字形に屈曲しながらのび、頸部と接合するものと思われる。内面には連続指オサエ列により面を形成する箇所が認められ、外面には78・80のように断続ハケが施される。

81~84は肩部の破片である。81・82は大きく肩部が張り、外面には10本/cmの断続ヨコハケを施している。内面には指オサエが密に認められ、器面に凹凸が目立つ。83は外面に5mm幅の小型竹管文が1個単位で施され、線刻により区画が認められる。内面には連続指オサエ列が顕著に残る。84は外面に右上がりの丁寧な連続鋸歯文が認められる。

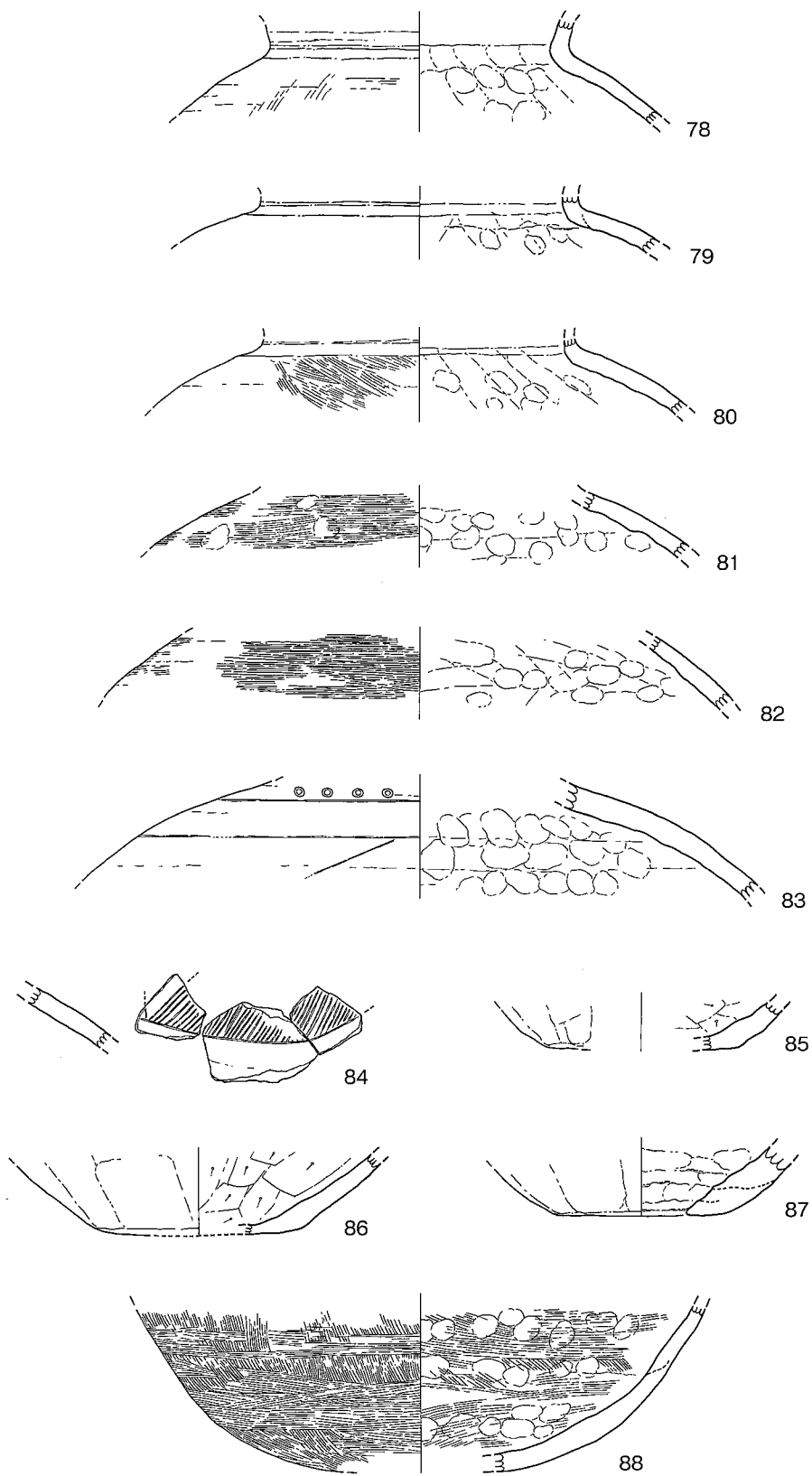
85~88は底部と思われる個体である。85・86は丸みを有する胴部から緩やかに窄まり、平底面を有し、底面の器壁がかなり薄くなる。外面には板ナデ、内面にはヘラケズリが顕著に認められる。87は器壁が厚く、底面には雑な焼成前穿孔がみられる。内面には粘土紐接合痕および指オサエが列状に認められる。88は内外面に8~10本/cmの細かな断続ハケ調整が密に施され、内面には粘土紐接合部付近に列状の指オサエが顕著に残る。

(山内英樹)



0 10cm  
(1 : 3)

第20図 埴輪 (11)



0 10cm  
(1:3)

第21圖 植輪 (12)

第1表 埴輪観察表(1)

数値は「cm」である。

番号	種類	出土地点	部位	直径 (突帯径)	突帯高	器壁	外面調整	内面調整	色調	顔料	備考
1	円筒口縁	—	口縁	(33.8)	1.4	0.9~1.1	ヨコハケ・ナメハケ(8本/cm)・ナデ	板ナデ・指オサエ	明黄褐色	○	短小口縁。端部欠損
2	円筒口縁	くびれ部東側	口縁	(35.0)	—	0.8~1.1	板ナデか	指オサエ	灰黄褐色	○	口縁端部が屈曲。突帯剥離
3	円筒口縁	前方部西側	口縁	(37.5)	—	0.9~1.2	板ナデ・指オサエ	板ナデ・指オサエ	明黄褐色	○	端部上面に平坦部あり
4	円筒口縁	—	口縁	(48.0)	—	0.9~1.2	ヨコハケ(10本/cm)	ヨコハケ(10本/cm)・指オサエ	明黄褐色	○	口縁は外傾気味
5	円筒口縁	前方部南東側上段	突帯	(32.0)	1.1	0.9~1.2	板ナデ(ハケ?)	板ナデ?ケズリ	明黄褐色	○	口縁部が大きく屈曲
6	円筒口縁	前方部南東側上段	口縁	—	—	0.9~1.0	ナデ	ナデ	明黄褐色	○	端部が尖り気味
7	円筒体部	前方部西側上段	突帯	40.0	1.3	0.9~1.0	ナデ	ナメナデ・指オサエ	明黄褐色	○	右上がりの鋸歯文・放射状線刻。竹管文(小)が3段にあり。方形スカシ。黒斑あり
8	円筒体部	くびれ部西側	胴部	(34.0)	—	0.9~1.1	ナデ	ナメナデ・指オサエ	明黄褐色	○	放射状の線刻、竹管文(小)あり。方形スカシには2重の線刻
9	円筒体部	後円部北西側	突帯	(36.0)	1.2	0.6~1.1	ナデ(一部ハケ?)	タテまたはナメナデ・指オサエ	明黄褐色	○	上(左上がり)・下(右上がり)に鋸歯文
10	円筒体部	—	突帯	(34.0)	1.3	0.8~0.9	ナデ	ナメナデ・指オサエ	明黄褐色	○	左上がりの鋸歯文。方形スカシには線刻枠
11	円筒体部	前方部西側	突帯	(32.4)	1.4	0.8	ナデか	板ナデ	明黄褐色	○	右上がりの平行線刻・竹管文(大)が2個単位。方形スカシ
12	円筒体部	前方部西側	突帯	(33.2)	1.3	0.8~0.9	板ナデ	板ナデ・ケズリ	明黄褐色	○	右上がりの平行線刻・竹管文(大)が上下に2個単位
13	円筒体部	前方部西側	突帯	(36.1)	1.5	0.8~0.9	ナデ	ヨコまたはナメナデ	明黄褐色	○	平行線刻。竹管文(大)あり。方形スカシには線刻枠?
14	円筒体部	後円部北西側~くびれ部	突帯	(34.2)	1.2	0.8~0.9	ナデ	ナデ・指オサエ	明黄褐色	○	竹管文(大)が上下に1個単位
15	円筒体部	—	突帯	(35.6)	1.2	1.0~1.1	タテ・ヨコ・ナメハケ(10本/cm)・ナデ	ナメハケ(7本/cm)・指オサエ	橙色	○	竹管文(大)が上下に2個単位。方形スカシ
16	円筒体部	前方部西側	突帯	(31.4)	1.1	0.8	タテハケ(8~10本/cm)・ナデ	ケズリ	明黄褐色	○	竹管文(大)が2個単位。方形スカシ
17	円筒体部	前方部西側上段	突帯	(29.2)	1.1	0.8~0.9	ナメハケ(10~12本/cm)・ナデ	ナデ・指オサエ	明黄褐色	○	三角文? 右上がりの平行線刻
18	円筒体部	くびれ部西側	突帯	(37.6)	1.5	0.9~1.0	ヨコハケ(8~9本/cm)・ナデ	ナデ・指オサエ	明黄褐色	○	幅広の左上がり平行線刻
19	円筒体部	前方部南西側下段	突帯	(35.0)	1.3	0.9	ヨコハケ(10本/cm)・ナデ	ナデ・ケズリ?	にぶい黄橙	○	幅広の左上がり・幅狭の右上がり平行線刻。黒斑あり
20	円筒体部	前方部西側上段	突帯	(34.4)	1.2	0.7~0.8	ナメハケ(8~10本/cm)・ナデ	ナメハケ(6本/cm)・指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	2重の縦方向線刻あり
21	円筒体部	前方部西側	突帯	(32.2)	1.2	0.8~0.9	ナメハケ(10本/cm)・ナデ	ナデ・指オサエ	明黄褐色	○	鋸歯文? あり。竹管文(小)?
22	円筒体部	前方部西側上段	突帯	(33.8)	1.4	0.8	ナメハケ・ヨコハケ(7~8本/cm)・ナデ	ヨコハケ(10本/cm)・指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	方形スカシ
23	円筒体部	くびれ部西側下段	突帯	(33.6)	1.6	0.9~1.0	ナデ	ナメナデ・指オサエ	明黄褐色	○	方形スカシ
24	円筒体部	前方部西側	突帯	(30.8)	1.4	0.6~0.7	ナメハケ(7~8本/cm)・ナデ	ヨコハケ(8本/cm)・指オサエ・板ナデ	明黄褐色	○	突帯が幅広。貼付オサエ目立つ
25	円筒体部	—	突帯	(33.4)	1.4	0.6~1.0	ヨコハケ(10本/cm)・ナデ	ナメナデ・指オサエ	明黄褐色	○	右上がりの鋸歯文。突帯幅狭。黒斑あり
26	円筒体部	くびれ部西側下段	突帯	(30.8)	1.5	1.0	ヨコハケ(10本/cm)・ナデ	ナメナデ・指オサエ	橙色	○	右上がりの鋸歯文。方形スカシ。突帯幅狭
27	円筒体部	くびれ部西側下段	突帯	(36.4)	1.6	0.7~0.8	ヨコハケ(8~9本/cm)・ナデ	指ナデ	明黄褐色	○	右上がりの鋸歯文。突帯幅狭で上端尖り気味
28	円筒体部	くびれ部西側下段	突帯	(36.6)	1.4	0.9~1.0	ヨコハケ(8~9本/cm)・ナデ	指ナデ	明黄褐色	○	右上がりの鋸歯文。突帯幅狭で上端尖り気味。27と同一個体か?
29	朝顔体部?	—	突帯	(23.8)	2.4	0.8~0.9	ナデ	ナデ・指オサエ	明黄褐色	○	鏝状に突帯のびる
30	朝顔体部?	くびれ部西側下段	突帯	(27.5)	2.2	0.6~1.0	ナデ	ナデ・指オサエ	明黄褐色	○	鏝状に突帯のびる。半円形の割込
31	朝顔体部	くびれ部西側下段	突帯	(31.0)	1.3~	0.7~0.9	ヨコハケ(10~12本/cm)・ナデ	指オサエ	橙色	○	突帯上向きに屈曲。方形スカシ
32	朝顔体部	くびれ部西側下段	突帯	(32.6)	2.7~	0.8	ナデ	指オサエ	明黄褐色	○	突帯上向きに屈曲
33	朝顔体部	—	突帯	(34.4)	2.6~	0.8~0.9	ナデ・指オサエ	指オサエ	明黄褐色	○	突帯上向きに屈曲

第2表 埴輪観察表(2)

数値は「cm」である。

番号	種類	出土地点	部位	直径 (突帯径)	突帯高	器壁	外面調整	内面調整	色調	顔料	備考
34	—	前方部南東側上段	胴部	—	—	1.0	ヨコハケ(10本/cm)	指オサエ	明黄褐色	○	方形スカシには2重の線刻枠
35	—	くびれ部西側	胴部	—	—	0.8~1.0	ナデ	指ナデ	明黄褐色	○	方形スカシには2重の線刻枠。スカシには面取り痕のような跡
36	—	前方部西側上段	胴部	—	—	0.7~0.9	ナナメハケ(10本/cm)	指オサエ	明黄褐色	○	方形スカシおよびその周囲には2重の線刻枠
37	—	後円部北西側~くびれ部	胴部	—	—	0.7~0.9	タテハケ(4~5本/cm)・指オサエ	ナデ	橙色	○	方形スカシ
38	不明	前方部南西側下段	突帯?	—	1.9~	0.7~0.9	指オサエ	ナデ	橙色	○	突帯上向きに屈曲。鱗の可能性?
39	円筒底部	後円部北西側上段	基底部	(31.2)	—	0.9~1.4	板ナデ・指ナデ	指オサエ・ナナメナデ・ケズリ	黄褐色	○	裾開き。黒斑あり
40	円筒底部	前方部北西隅	基底部	(31.2)	—	1.0~1.3	板ナデ・指ナデ・指オサエ	指オサエ・ナデ	灰黄褐色		裾開き。板の置き台痕が残る
41	円筒底部	—	基底部	(33.2)	—	1.0~1.4	板ナデ・指ナデ	指オサエ・ナデ	明黄褐色		直立気味。端部潰れなし
42	円筒底部	くびれ部西側下段	基底部	(31.6)	—	0.9~1.3	タテハケ(8~10本/cm)・指ナデ	指オサエ・ナデ	明黄褐色	○	直立気味。端部潰れなし。黒斑あり
43	円筒底部	くびれ部西側	基底部	(33.8)	—	0.9~1.4	タテハケ(10本/cm)・指ナデ	指オサエ・ナデ	褐灰色	○	直立気味。黒斑あり
44	円筒底部	後円部北西側上段	基底部	(46.0)	—	1.0~1.5	ナナメハケ(10本/cm)・指ナデ	指オサエ・ナデ	明黄褐色	○	直立気味。オサエ列顕著。黒斑あり
45	朝顔口縁	くびれ部西側下段	口縁	(41.6)	—	0.7~1.0	ハケ?・ナデ	ナデ	橙色	○	端部上面が窪む
46	朝顔口縁	—	突帯	—	0.8	1.1~1.8	ナデ	指ナデ	橙色	○	二重口縁状。突帯下向き
47	朝顔口縁	くびれ部西側	突帯	(36.4)	0.9	0.7~1.3	ナデ	ナナメナデ・指オサエ?	明黄褐色	○	二重口縁状。突帯下向き
48	朝顔口縁	くびれ部西側下段	口縁	(53.0)	0.9	0.5~1.7	タテハケ(8~10本/cm)・板ナデ	指オサエ・ナデ	橙色	○	二重口縁状。端部上面が窪む
49	二重口縁壺	くびれ部西側下段	口縁	(34.6)	—	0.8~1.3	ナデ	指ナデ	橙色	○	端部付近で屈曲。擬口縁が突出。口縁中央部が肥厚
50	二重口縁壺	—	口縁	—	—	0.8~1.1	板ナデ・指ナデ	ヨコハケ(5本/cm)・ナデ	明黄褐色	○	擬口縁の突出少ない。口縁中央部が肥厚
51	二重口縁壺	前方部西側	口縁	—	—	0.8~1.4	ナデ	指オサエ・ナデ	明黄褐色	○	擬口縁が突出。口縁中央部にかけて肥厚
52	二重口縁壺	くびれ部西側上段	口縁	—	—	0.7~1.1	板ナデ	指オサエ・ナデ	明黄褐色	○	擬口縁が突出。口縁中央部にかけて肥厚
53	二重口縁壺	後円部北西側上段	口縁	—	—	0.8~1.2	タテハケ(10本/cm)・指ナデ	指ナデ	橙色	○	擬口縁が鈍く突出。口縁中央部にかけて肥厚
54	二重口縁壺	くびれ部西側下段	口縁	—	—	0.8~1.2	ナデ	ナデ	橙色	○	平行線刻(銅文?)および竹管文(大)1個単位あり。擬口縁が突出。口縁中央部にかけて肥厚
55	二重口縁壺	くびれ部西側下段	口縁	—	—	0.7~1.4	タテハケ?・ナデ	ナデ	橙色		竹管文(大)2個単位。擬口縁の突出少ない。口縁中央部にかけて肥厚
56	二重口縁壺	くびれ部西側下段	口縁	—	—	1.3~1.5	ナデ	指ナデ	橙色	○	内外面に竹管文(大)2個単位と1個のもの有り。やや大型
57	二重口縁壺	—	口縁	—	—	0.8~1.3	指ナデ・板ナデ	指オサエ・ナデ	明褐色		外面に竹管文(中)1個単位、内面は2個単位。左上がりに鋸歯文が2段あり。やや大型
58	広口壺	くびれ部西側~前方部	口縁	(23.6)	—	0.8~1.2	タテハケ(8~9本/cm)・ナデ	ナデ	橙色	○	口縁端部が上方に突出。4cm程度の水平面を有する
59	広口壺	後円部南側	口縁	(27.2)	—	0.7~1.0	指ナデ	指オサエ・ナデ	明黄褐色	○	口縁端部が上方に突出。3cm程度の水平面を有する
60	広口壺	くびれ部西側下段	口縁	(28.6)	—	0.8~1.3	指ナデ	板ナデ・指ナデ	にぶい黄褐	○	口縁端部が上方に突出。4cm程度の水平面を有する。黒斑あり
61	広口壺	くびれ部西側下段	口縁	29.6	—	0.7~1.2	タテハケ(8~10本/cm)・ナデ	指オサエ・ナデ	黄褐色	○	口縁端部が薄く、あまり尖らない。4cm程度の水平面を有する
62	壺頸部	くびれ部西側下段	頸部	—	—	0.8~1.2	タテハケ(10本/cm)・ナデ	ナデ	橙色	○	頸部から大きく屈曲。
63	壺頸部	くびれ部西側下段	頸部	—	—	0.6~0.9	タテハケ(8~10本/cm)・ナデ	板ナデ	明黄褐色	○	頸部から大きく屈曲。
64	壺頸部	—	頸部	—	—	0.7~1.3	タテハケ(10~12本/cm)・指ナデ	指オサエ・ナナメナデ	明黄褐色	○	頸部下半に接合痕あり。胴部との接合付近は器壁薄い
65	壺頸部	—	頸部	—	—	0.7~0.9	板ナデ	ナナメハケ(8本/cm)・指ナデ	橙色	○	頸部下半に接合痕あり。胴部との接合付近は器壁やや薄い
66	壺頸部	前方部北東隅	頸部	—	—	0.7~1.1	ヨコハケ(8本/cm)・指ナデ	指オサエ・ナナメナデ	灰黄褐色	○	頸部下半に接合痕あり。胴部との接合付近は器壁薄い

第3表 埴輪観察表(3)

数値は「cm」である。

番号	種類	出土地点	部位	直径 (突帯径)	突帯高	器壁	外面調整	内面調整	色調	顔料	備考
67	壺頸部	くびれ部西側	頸部	—	—	0.6~1.1	板ナデ・指ナデ	指オサエ・板ナデ・指ナデ	明黄褐色	○	頸部下半に接合痕あり。胴部との接合付近は器壁かなり薄い
68	壺頸部	くびれ部西側～前方部	頸部	—	—	0.5~1.2	指オサエ・板ナデ・指ナデ	指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	頸部下半に接合痕あり。胴部との接合付近は器壁かなり薄い
69	壺頸部	前方部西側上段	頸部	—	—	0.6~1.7	板ナデ	指オサエ・指ナデ	橙色	○	2個単位の竹管文(大)あり。頸部下半に接合痕あり。頸部中央は器壁厚め。屈曲部に割離痕
70	壺頸部	—	頸部	—	—	1.0~1.4	板ナデ	指オサエ・板ナデ・指ナデ	橙色	○	器壁厚めで頸部が直線的
71	壺屈曲部	くびれ部西側下段	突帯	(13.8)	1.0	0.6~1.7	ナデ	指オサエ・指ナデ	橙~明黄褐	○	頸部は器壁厚い。屈曲部に断面三角形の突帯を貼付
72	壺肩部	くびれ部西側下段	突帯有	(12.5)	0.8	0.5~0.8	ナデ・ハケ?	指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	屈曲部に断面三角形の突帯を貼付
73	壺肩部	くびれ部東側	突帯有	(12.8)	0.7	0.6	ナデ	指ナデ	明黄褐色	○	屈曲部に断面三角形の小さな突帯を貼付
74	壺肩部	くびれ部西側下段	突帯有	(12.6)	1.0~	0.7~0.8	ナデ	指オサエ	明黄褐色	○	屈曲部に鋭く尖った断面三角形の突帯を貼付
75	壺肩部	前方部西側	突帯有	(11.6)	1.3	0.5~0.8	ヨコ・ナナメハケ(8本/cm)・ナデ	指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	屈曲部に突出した断面三角形突帯を貼付
76	壺肩部	後円部北西側上段	突帯有	(12.0)	1.6	0.6~0.8	ナデ	シボリ・指オサエ	橙色		屈曲部の突帯は厚く丸みを帯びる
77	壺肩部	前方部北西隅上段	突帯有	(12.0)	0.9	0.5~0.9	ナデ	指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	屈曲部の突帯は厚く丸みを帯びる
78	壺肩部	後円部西側上段	突帯無	(13.0)	—	0.5~0.8	タテハケ(5本/cm)・ナデ	指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	屈曲部は「く」字形を呈する
79	壺肩部	くびれ部西側上段	突帯無	(14.0)	—	0.7	ナデ	指オサエ・指ナデ	橙色	○	内面に接合痕
80	壺肩部	くびれ部西側上段	突帯無	(13.6)	—	0.5~0.8	ナナメハケ(12本/cm)・指ナデ	指オサエ・指ナデ	橙色	○	頸部は上方へのびる
81	壺肩部	くびれ部西側上段	肩部	—	—	0.6~0.8	ヨコハケ(10本/cm)・指オサエ	指オサエ	明黄褐色	○	列状のオサエ。肩がやや張る
82	壺肩部	くびれ部西側下段	肩部	—	—	0.6~0.8	ヨコハケ(10本/cm)	指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	列状のオサエ
83	壺肩部	—	肩部	—	—	0.8~1.1	ナデ	指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	線刻で区画。山形文?。竹管文(小)が1個単位
84	壺肩部	くびれ部西側下段	肩部	—	—	0.7	ナデ	指オサエ・指ナデ	明黄褐色	○	肩部に右上がりの鋸歯文
85	壺底部	前方部北西隅	底部	(8.4)	—	0.6~1.0	板ナデ	ケズリ	明黄褐色	○	平底状。底面の器壁薄め
86	壺底部	くびれ部西側下段	底部	(8.7)	—	0.4~0.9	板ナデ	ケズリ	明黄褐色		平底状。底面の器壁薄め
87	壺底部	くびれ部西側	底部	(8.0)	—	0.3~1.3	板ナデ	指オサエ	にぶい黄橙		焼成前穿孔。粘土紐接合痕が顕著。黒斑あり
88	壺底部	—	底部	—	—	0.6~1.1	ナナメ・ヨコハケ(8~10本/cm)	ナナメ・ヨコハケ(8~11本/cm)・指オサエ	明黄褐色	○	丸底。底部の器壁厚い。黒斑あり

(註1) 今回、出土地点についての情報は、発掘調査当時の調査区名およびトレンチ名を記した図面(報告書記載)を参考に、遺物注記と照合しながら掲載している。詳細は県教育委員会の報告書を参照されたい。

(註2) 調査区と報告名称との関係は以下のとおりである。愛媛県教育委員会の報告書で「1段」とはテラス上段、「2段」とは下段(墳裾)を指す。また、トレンチ名の後に「'」がつくと、東側を指す。

- 1区：後円部南側 2区：後円部南西側 3区：後円部北西側～くびれ部 4区：くびれ部西側  
 5区：前方部西側 6区：前方部北西側(隅角)
- Aトレンチ：墳丘主軸 Bトレンチ：後円部西側 Cトレンチ：くびれ部西側  
 Dトレンチ：前方部南側 Eトレンチ：前方部北側



## (5) 中世土器

### 1 【第22図-1】土師質土器皿 3区出土

口径推定12cm、器高2.9cm、底径推定6cm。

体部は大きく開き、口縁端部の外反は顕著で、底部は厚い作りである。外面はナデ調整がされる。底部は静止糸切り痕が見られる。胎土は石英を少量含む。色調は淡黄色(2.5Y8/4)。器形は湯築城跡土師質土器皿・杯分類のG-1類に類似する。

### 2 【第22図-2】土師質土器皿 第4区第一段平坦部出土

口径推定10.5cm、器高2.9cm、底径5.2cm。

口縁部は内湾気味で内面に段がみられる。体部と底部の境が不明瞭である。外面はナデ調整がみられ、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整されている。胎土は石英を少量含む。色調はにぶい橙(7.5YR6/4)。器形は湯築城跡のC-1類に類似する。

### 3 【第22図-3】土師質土器坏 第4区第一段平坦部出土

口径8.8cm、器高2.3~2.7cm、底径4.8cm。

口縁部が外反し、全体的に厚手である。内外面にナデによる幅広の段がみられる。底部はヘラ切りである。胎土は石英を少量含む。色調はにぶい橙(7.5YR6/4)。器形は湯築城跡のA-2類に類似する。

### 4 【第22図-4】土師質土器皿 第4区第二段出土

口径推定13.1cm、器高3.7cm、底径7.5cm。

体部は大きく開き、口縁端部が外反気味で底部が分厚い。内外面はナデ調整され、底部は静止糸切り底である。胎土は石英を少量含む。色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)。器形は湯築城跡のG-1類に類似する。

### 5 【第22図-5】土師質土器坏 B地区後円・前方の境出土

口径推定8.4cm、器高2.4cm、底径4.6cm。

口縁が外反し、器高が高く、厚手である。内外面にナデによる幅広の段を有する。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整される。胎土は石英を少量含む。色調はにぶい黄橙(10YR6/4)。器形は湯築城跡のA-2類に類似する。

### 6 【第22図-6】土師質土器皿 下段周辺出土

残存器高1.8cm、底径5.8cm。

底は分厚く、内底面に細かい段を有する。体部と底部の境が不明瞭である。底部は回転ヘラ切り。胎土は石英を少量含む、色調はにぶい橙色(5YR6/4)。器形は湯築城跡のC-1類に類似する。

### 7 【第22図-7】土師質土器皿

口径推定10cm、器高2.1cm、底径推定7.5cm。

体部が内湾し、口径に対し底径が大きく器高が低い。体部と底部の境が丸みを帯びて不明瞭である。内外面にナデ調整がみられる。底部はヘラ切り。胎土は白く精選している。色調は浅黄橙(10YR8/4)。器形は湯築城跡のE-2類に類似する。

### 8 【第22図-8】青花碗 後円部主体部出土

口縁部の破片。体部はやや内湾し、口縁は直口する。外面は口縁上部に二重圏線、胴部に植物文、内面は口縁上部に二重圏線が染付されている。胎土色調は灰白色。景德鎮系。

9 【第22図-9】土師質土器播鉢

口縁と胴部の破片。口縁部は稜をもち強く内湾する。播り目は6本を1単位とする。胎土は石英、黒色粒子が多い。色調はにぶい橙 (5YR7/4)。

10 【第22図-10】土師質土器鍋 第3区出土

口縁部の破片。口縁部に稜をもち外反する。外面に焦げ目がみられる。胎土は石英が多く、色調はにぶい橙 (7.5YR7/4)。

11 【第22図-11】備前焼大甕 4-2区出土

残存器高7cm。

底部の破片。内外面にナデ調整がみられる。胎土は黒粒子、砂粒が多い。外面色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3)。

12 【第23図-12】土師質土器羽釜 第四区第一段平坦部出土

口径22.1cm、器高27.6cm、底径25.1cm。

鐔が口縁部に接して貼り付けられ、鐔の上面は水平に仕上げている。底部が平底である。脚部は底部に接して三本貼り付けられている。内外面はナデ調整があり、底に刷毛目がみられる。胎土は石英が多く、色調は橙色 (2.5YR6/6)。外面にススが付着している。

13 【第23図-13】土師質土器羽釜 第四区第一段平坦部出土

口径推定18cm。

鐔が口縁部に接して貼り付けられ、鐔の上面は少し下がっている。胎土は石英が多く、色調はにぶい黄褐色 (10YR5/4)。外面にススが付着している。

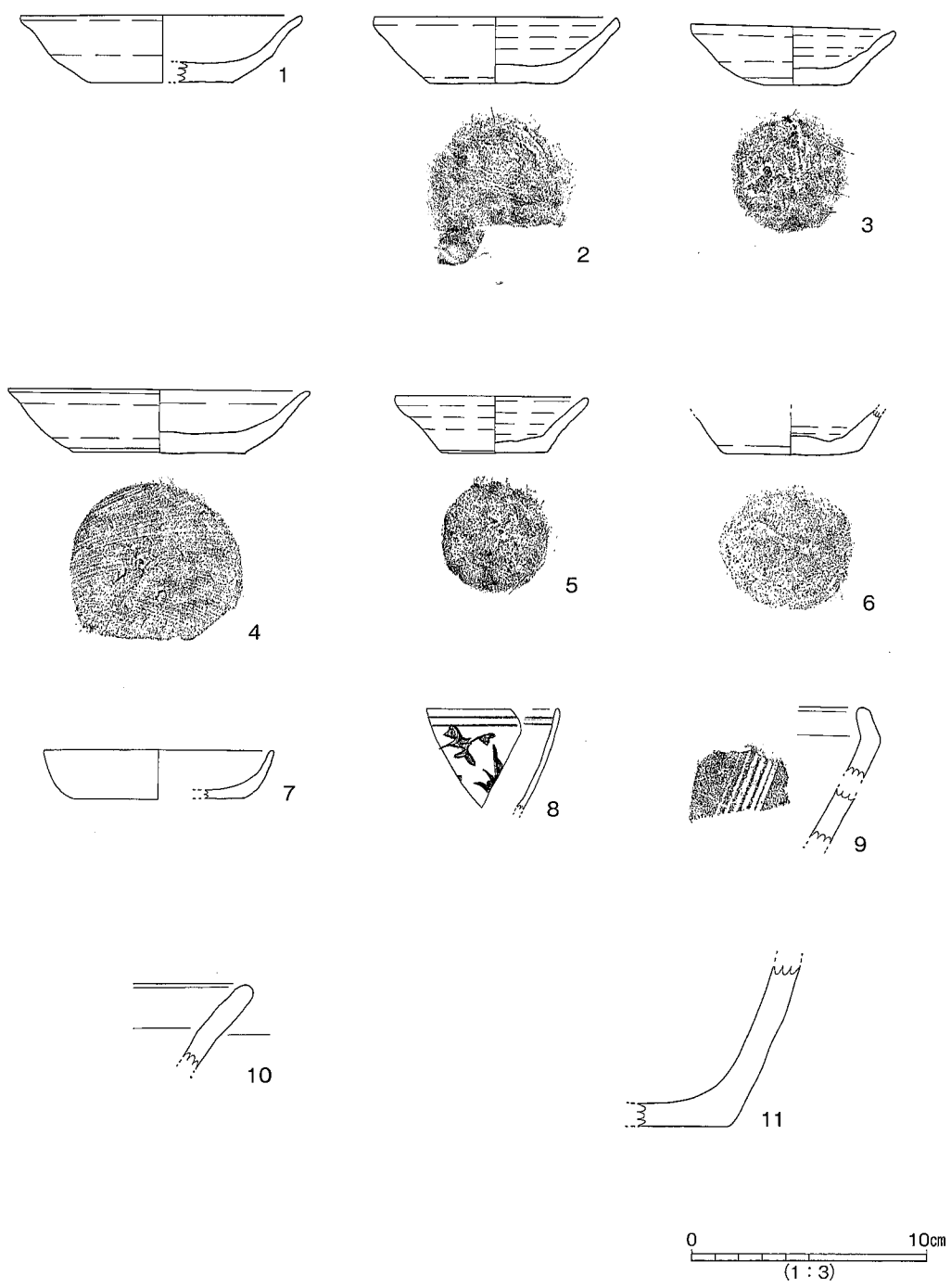
14 【第23図-14】土師質土器羽釜 Cトレンチ西1出土

口径推定16cm。

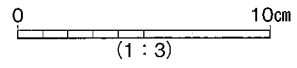
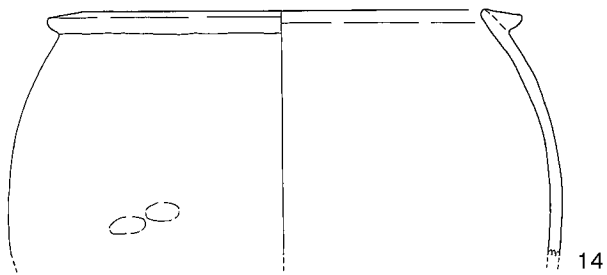
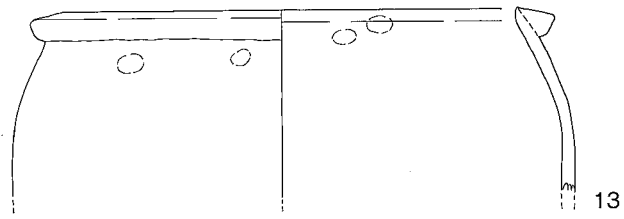
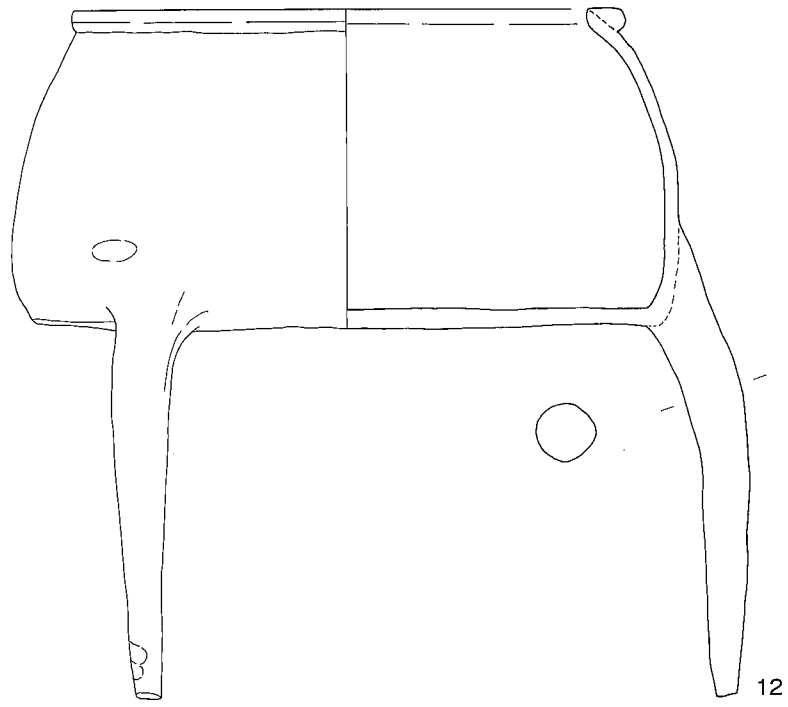
鐔が口縁部に接して貼り付けられ、鐔の上面は少し下がっている。胎土は石英が多く、色調は橙色 (5YR6/6)。外面にススが付着している。

【註】土器の観察にあたっては、柴田圭子氏にご教示をいただいた。

(石岡ひとみ)



第22図 中世土器 (1)



第23図 中世土器 (2)

## 6. 相の谷9号墓出土遺物

### (1) 相の谷9号墓の概要

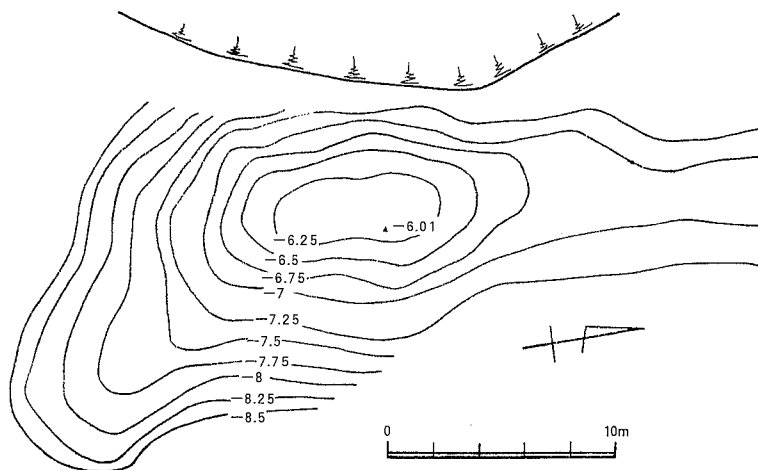
相の谷1号墳と同一丘陵上に立地し、1号墳の南側約30mに位置する。1号墳の1次調査後の1966年7月に発見され、墳丘測量の結果、方形台状墓と判断された。緊急調査が1966年12月28日～1967年1月9日と同年3月23日～29日に実施されている。調査報告は調査参加者の正岡睦夫氏と泉本知秀氏によって行われている（正岡・泉本 1973）。以下の概要は正岡氏が1985年に報告した文章（正岡 1985, p.36～37）を引用する形で紹介する。

「相の谷8号墳に先行して、同一地点に9号墓がつくられていた。形態は長方形の一辺に造り出しが付いた形になっている。大きさは、長径13.2m、幅4m、造り出し状のもの幅3.7m、高さ1.7mである。周囲には溝がめぐっているが高さが違って交わらない。西側の溝はさらに北へのびている。現状では幅20cm、深さ約10cmと細くて浅い。封土は8号墳の築造に伴うもの以外は確認されていない。地山は花崗岩の風化土である。

次に主体部について概観する。1号主体は北の端の細くなったところにあつて主軸と直交している。ほぼ東西方向に主軸をおく。長さ2.6m、深さ1.8mの土坑を掘り、その中央に石棺をつくるためにさらに掘り込みをつくっている。側石の部分には石にあわせた掘り込みをしている。天井石をかぶせるまでに側石を緑色粘土で補強してあり、埋葬ののち天井石をかぶせ、さらに、緑色粘土で覆った後、穴を埋めている。

箱式石棺は主軸を東西とし、内側の大きさは、全長180cm、最大幅38cm、最小幅23cmである。東側が広い。東寄りの部分は側壁の上に小型の石を補い、天井石をかぶせている。内部には土砂が入っておらず、頭骨の一部と脚部の骨が一部残っていた。頭部近くに窮孔のある流雲文の鏡片2、2つに折れた勾玉1、細形の管玉2、ガラス小玉17、それに5cmくらいの小石が1個検出された。

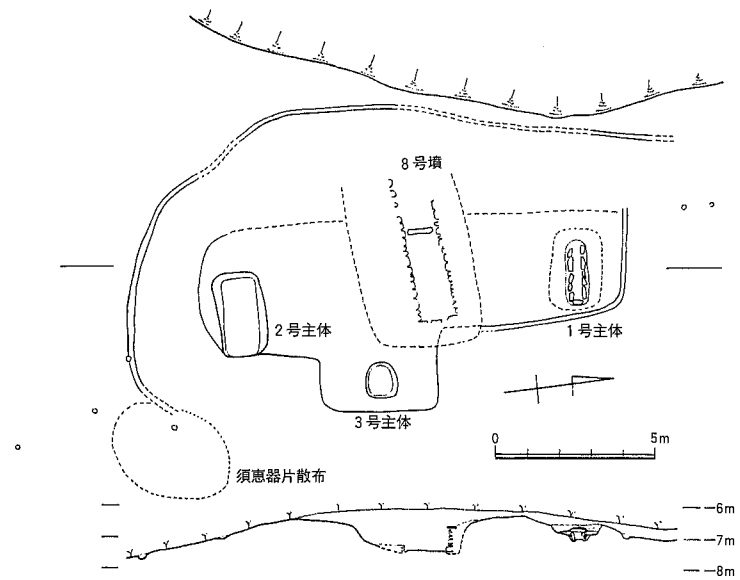
2号主体は南東よりの端につくられた土坑である。掘り込みは一部方形のマウンドからはみ出したようになっている。この部分には少し深く溝状の掘り込みがある。土坑の大きさは全長242cm、幅96cmである。土坑内には、木棺が直葬されていたものと推定される。副葬品には小型鉄剣1、鉄斧1、



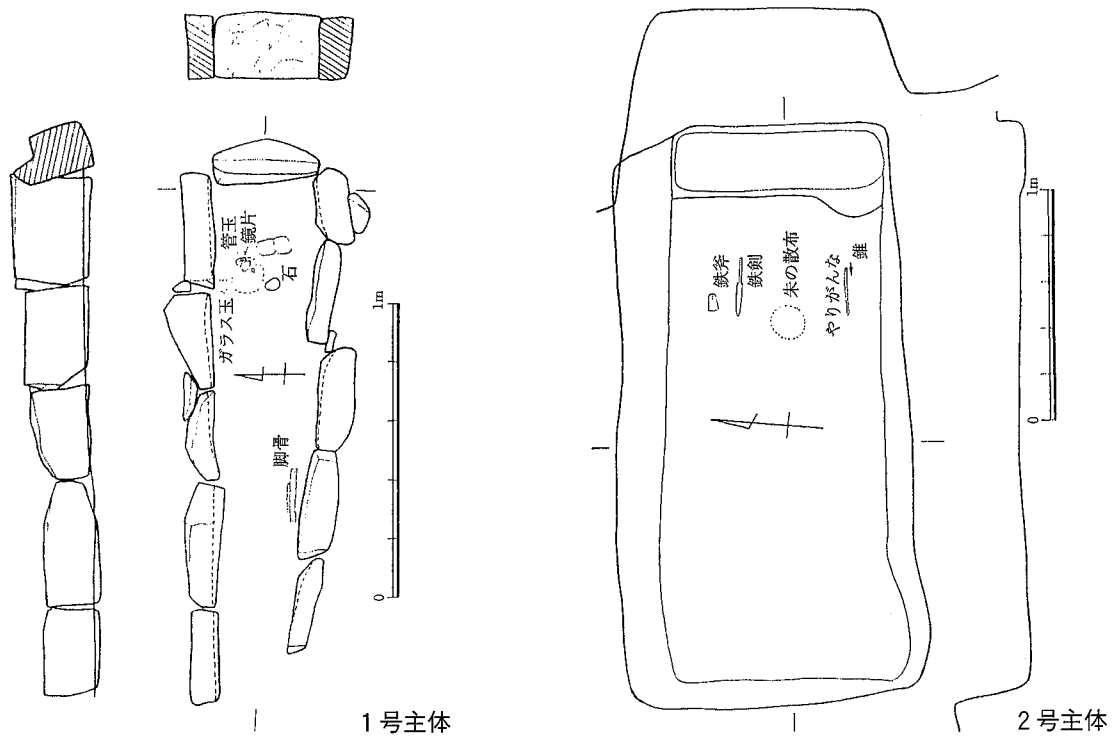
第24図 相の谷8・9号墓実測図（正岡・泉本 1973より転載）

鈍1がある。

3号主体は造り出し状の部分にある。埋葬のための土塚と考えるには少し小さいが一応主体部と推定している。大きさは長径92cm、短径80cmである。副葬品は発見されていない。」(正岡 1985, p.36~37)



第25図 9号墓平面・断面図(発掘後)(正岡・泉本 1973より転載)



第26図 1号主体・2号主体実測図(正岡・泉本 1973より転載)

資料一覧

品目	数量	図版番号	写真図版
[1号主体出土遺物]			
〈鏡〉			
破鏡（細線式獣帯鏡）	2	第27図1・2	図版20
〈玉類〉			
勾玉	1	第28図3	図版20
管玉	2	第28図4・5	図版20
ガラス小玉	17	第28図6～22	図版20
[2号主体出土遺物]			
〈武器〉			
鉄剣	1	第29図1	図版21
〈工具〉			
鉈	1	第29図2	図版21
鉄斧	1	所在不明	
錐	1	所在不明	

(2) 1号主体出土遺物

① 破鏡—1【第27図—1】

**遺存状況** 内区主紋帯から外区・縁にかけての破鏡である。内区主紋の乳の左側に径0.3cmの円孔が穿たれている。この孔は両面から穿孔・研磨されている。ほぼ全面がブロンズ病による錆で覆われ、製作時の状況を示す部分はほとんど残存していない。

**鑄造痕跡** 錆の為、鑄造時のオリジナルな面は残存せず、鑄造時の痕跡は認められない。

**文様構成** 内側から乳座のある乳を含む主紋帯、圏線、櫛歯紋帯、鋸歯紋帯、圏線、流雲紋帯で構成される。

**調整** 断面はほぼ全面に研磨痕を認めることができる。

**法量** 面径17.0cm（復元値） 厚さ0.5cm 櫛歯紋幅0.4cm 鋸歯紋幅0.5cm 流雲紋幅0.8cm 縁幅0.6cm 面反り0.2cm 重量48.80g

② 破鏡—2【第27図—2】

**遺存状況** 破鏡—1と同じく、内区主紋帯から外区・縁にかけての破鏡である。小片2点を含む合計3点から成る。紋様構成とその幅が一致することから破鏡—1と同一個体と考えられる。櫛歯紋帯に径0.3cmの円孔が穿たれている。孔は両面から穿孔・研磨されている。ほぼ全面がブロンズ病による錆で覆われ、製作時の状況を示す部分はほとんど残存していない。

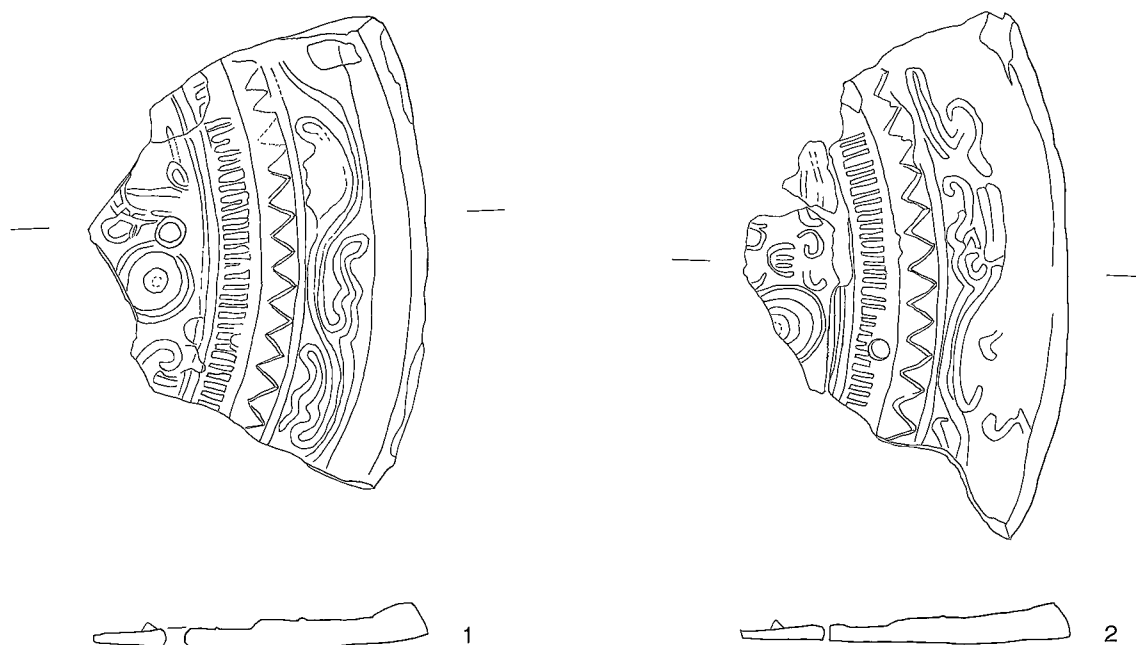
**鑄造痕跡** 錆の為、鑄造時のオリジナルな面は残存せず、鑄造時の痕跡は認められない。

**文様構成** 内側から乳座のある乳を含む主紋帯、圏線、櫛歯紋帯、鋸歯紋帯、圏線、流雲紋帯で構成

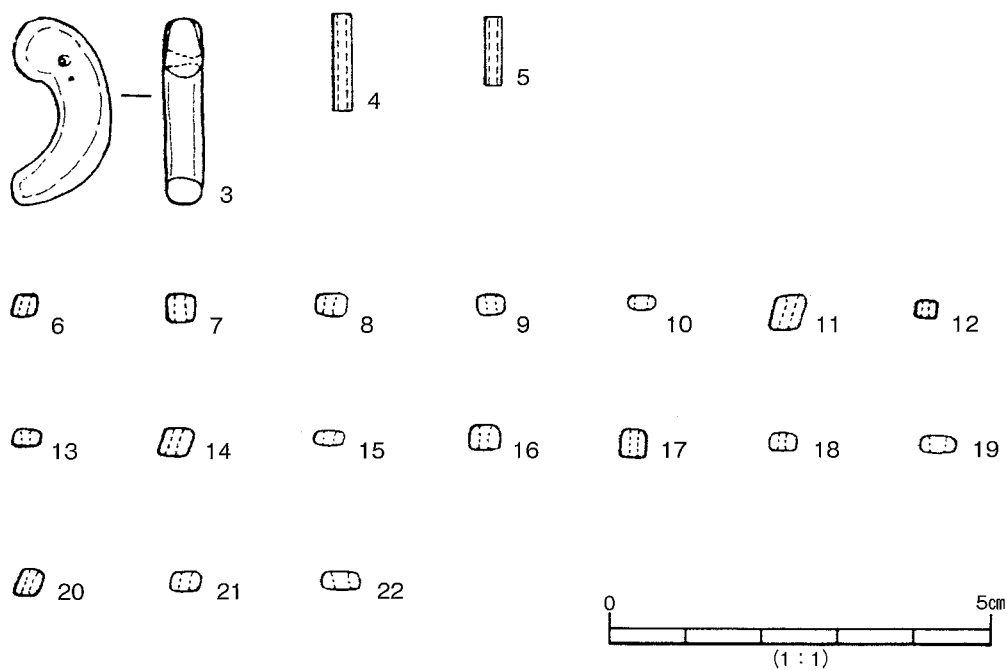
される。

調整 鋳のため、断面の状況は確認できない。

法量 面径17.0cm (復元値) 厚さ0.5cm 櫛歯紋幅0.4cm 鋸齒紋幅0.5cm 流雲紋幅0.8cm 面反り0.1cm 重量41.65g



第27図 相の谷9号墓出土遺物-1 (S=1:1)



第28図 相の谷9号墓出土遺物-2 (正岡・泉本 1973より転載)



③ 勾玉【第28図-3】

破片で出土した2点を接合し完形である。穿孔は両側から行われている。全長24.7mm、胴部幅7.2mm、最大厚4.9mm、孔径2.5mm。碧玉製。

④ 管玉【第28図-4・5】

2点とも碧玉製である。4は全長12.8mm、最大径2.8mm、孔径1.6mm。5は全長9.5mm、最大径2.4mm、孔径1.0mm。

⑤ ガラス小玉【第28図-6~22】

法量は下記の通りである<sup>(1)</sup>。

番号	最大厚mm	最大径mm	色調	番号	最大厚mm	最大径mm	色調
6	3.0	3.0	水色	15	2.0	4.0	水色
7	4.0	4.0	水色	16	3.5	4.0	水色
8	3.0	4.0	水色	17	4.0	3.5	水色
9	3.0	4.0	水色	18	2.5	4.0	水色
10	2.0	4.0	水色	19	2.0	5.0	水色
11	4.5	4.0	水色	20	3.5	3.0	水色
12	2.5	3.0	水色	21	3.0	4.0	水色
13	2.5	4.0	緑味水色	22	2.5	5.0	水色
14	4.0	4.0	緑色				

(3) 2号主体出土遺物

① 鉄剣【第29図-1】

全長24.8cmで、切先の先端を僅かに欠損する。剣身長14.0cm、剣身幅2.0cm、茎部長10.8cm、茎幅0.8~1.5cm。剣身部には木質が部分的に残存している。剣身の断面は凸レンズ状を呈する。関は角関である。茎部には木質が多く残存している。目釘孔は確認できない。茎部の断面は長方形を呈する。

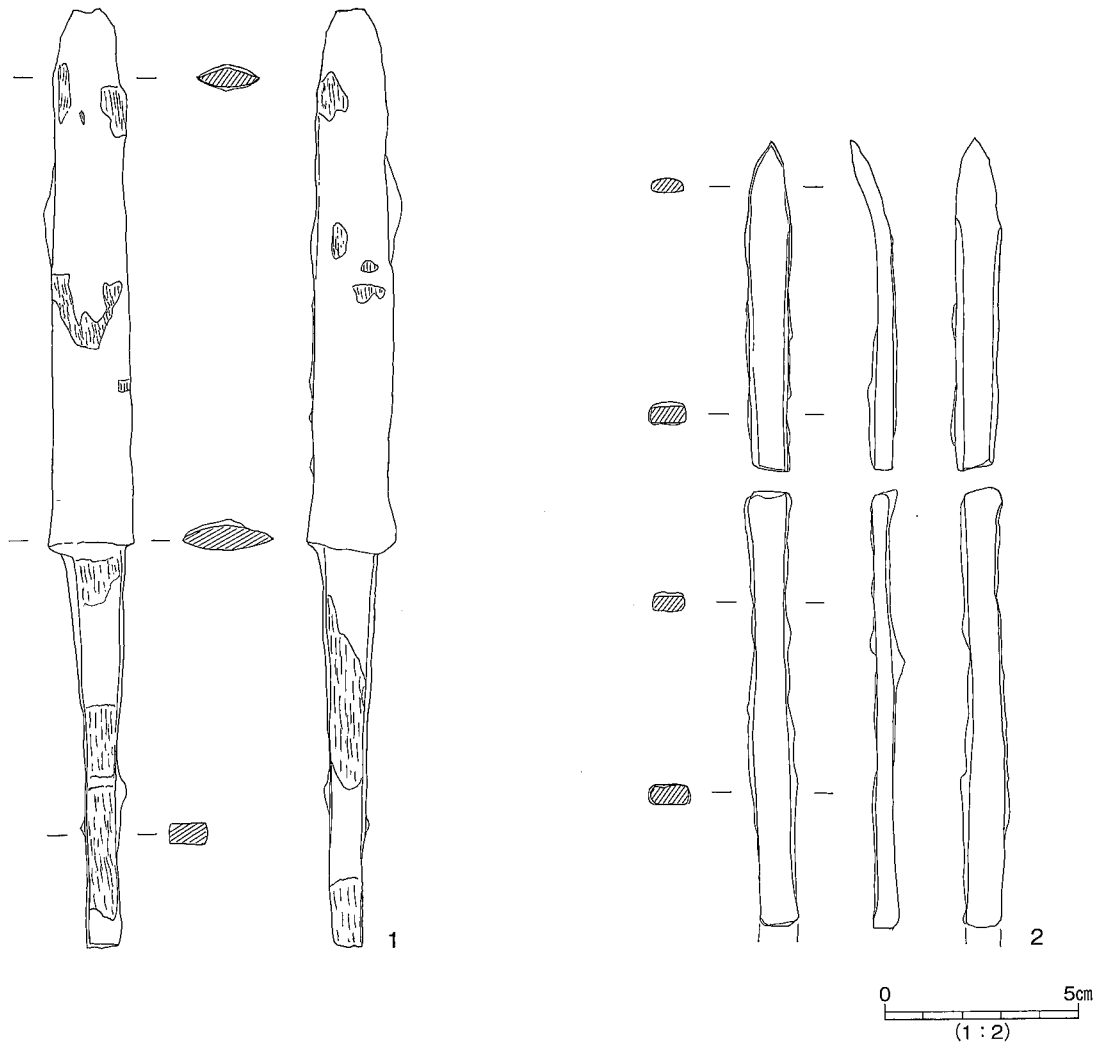
② 鉞【第29図-2】

1点と報告されているが、現状では2点に分かれ、同一個体であるが、接合することはできない。復元全長20.2cm。刃部は長さ2.5cm、最大幅1.0cm、最大厚0.4cm。刃部以外の部分は長さ17.7cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm。断面は長方形を呈する。

【註】

(1) ガラス小玉の法量・色調は、正岡・泉本 1973, p.36の第1表 玉類一覧表を転載した。なお、縦を最大厚、横を最大径に、摘要を色調に変更した。

(富田)



第29図 相の谷9号墓出土遺物-3